
愛しいアナタへの想いを綴って

tears

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛しいアナタへの想いを綴って

【Nコード】

N1246S

【作者名】

tears

【あらすじ】

親の再婚で家族となったふたり、同じ屋根の下で始まる新しい生活その中で芽生えていく感情に時には傷つき、時には戸惑い、時には導かれていく……………その感情がたとえ禁断だと思付いた時……………彼らが出す答えとは？

「カーナーター起きろよ」

目を開けるといつもの部屋にウザったい笑顔の幼馴染が……

「……………なんだよ？」

「なんだよ？つて迎えに来たんだよ……………愛しい彼方ちゃんのために……………入学式に遅れるよ？」

「……………頼んでない……………」

二度寝の不貞寝をするために布団を深く掛ける……………後ろでモゾモゾと何かが動くのを感じる

「……………おい」

「なに彼方？」

「なんで布団の中に入ってくるんだよ？」

「え？なんでって彼方が学校行かないって言うから一緒に寝ようか
なつて」

「なんでコイツと……………仕方ない……………」

「準備するから帰れ」

「やだ……………帰ったら彼方が二度寝するじゃん」

「……………チツ……………1階に下りてろ」

俺は素早く支度して1階に下りた

「お前なに不貞腐れているんだよ」

「朝から馬鹿の顔を見て機嫌の良くなる人が居るなら見てみたい」

「まあヒドイ……………そんなにひどいこと言つと置いて行っちゃうよ」

「いいぞ……………俺は二度寝するから早く行けよ」

「うそうそ……………一緒に行こうよ、彼方」

「……………チツ、いくぞ……………恭」

不本意ながら馬鹿な幼馴染と高校に向かうことになった

「いーやーだー」

「さっさと行けよ」

「彼方は平気なの？」

「平気も何も大歓迎だ」

「薄情者!!」

..... クラスが離れたくらいでウザい

「.....」

入学式が終わってクラス表を見た途端にこの調子の恭を無視して教室に入る..... 後ろから何かいろいろ聞こえたが知らんふりと...

「.....ふぁ」

眠くなるくらいつまらない入学式にウザい幼馴染と居れば自然に瞼が重くなるのは避けられない..... つまり、早く自分の席で寝たい

「…………あの

」……………」

「……………すいません」

「……………なんだよ」

低い声で返すと小さいのはビクッと肩を震わす

「最近、寝不足なんだよ……………用事なら早くしろ」

「……………あの……………よろしく」

「だから?」

「……………その……………」

「用が無いなら寝る」

小さいのおかげで安眠妨害さたが寝直すことにした。

「彼方……起きなさい」

「永遠の眠りにつけよ、くそ親父」

連絡事項と自己紹介を終わってあとコンビニによって適当なご飯を済ませ寝ることになっていたが一児の父親とは思えない若づくりをしているくそ親父よって妨げられる………なんだよ、今日はことごとく寝るのを妨げられる。

「飯ならコンビニのおにぎりを食べたぞ」

「ちゃんとしたのがあるから食べる」

「なんで？」

親父は呆れたようなため息をついた。

「いつも人の話は最後まで聞くものだって言ってるだろ……………再婚するって前に言っただろ」

ああ……………つて聞いてねえよ！！！！

「んだと？んなの聞いてねえよ」

「ちゃんと伝えたぞ？でもお前ときたらどうでもいいと言って寝たんだろ？……………とにかく降りて来い」

俺が小学卒業する直前に亡くなった……………俺のせいだな

「……………はあ、降りればいいんだろ？着替えるから出ていけ」

「お前は……制服はハンガーに掛けてから寝ろよな」

ボタンと扉が閉まるのを聞いたあと制服から普段着に着替えた。

「あ！大事なこと言い忘れたけど、大丈夫だよな？」

「……………おい、くそ親父？」

「……………なんだ？ばか息子？」

リビングに来てそこにいたのは長い漆黒の髪に白い肌の美女……………
……………色々和我慢してそこは追求しないで置くとして……………

「なんだよ？」

俺の目が節穴でなければ、目にかろうじてかかるくらいの漆黒の髪に黒曜石を思わせる深みある黒い瞳、白い綺麗な肌、母親譲りの綺麗と可愛いの中間の顔……………どう見ても……………

「息子がいるなんて聞いてねえぞ」

「言っていないからな……………紹介するぞ、この人が彼方の母親になる明美さんで兄弟になる光くんだ」

苛立つ俺が無言になると親父が光に自己紹介を始めた。

「一応、知ってると思うけど、月宮 聖夜だ、不本意かもしれないが君の父親になりました」

「いえ……」

「それはよかった、彼方だと、こう一筋縄ではいかないからな」

「なら、寝てるぞ」

2階に戻ろうと服を掴まれ再びとファーに座らせられる。

「これから明美さんの息子で光くんの兄貴なる彼方だ、愛想が悪いが頼む」

……悪かったな

「いえいえ、こんな格好いいお兄さんができて嬉しいよね？」

「………うん」

「………あつそ、じゃあ、明日も学校があるから寝るよ」

俺はソファから立ち上がり自室に戻った……………

「人が他人嫌いだと知っておいて…………あのくそ親父」

ム力つくがいまさら反対しても仕方ないと諦め眠りについた……………
……………あとからこの再婚を強く反対すればよかったと後悔する
羽目になるとは今はまだ知らなかった。

『光？4月から聖夜さんのさんのお世話になるから……』

普通、入試直前に言うか？……まあ、今、住んでいる所より近いからいいけど、確か聖夜さんっていう人と紅夏高校の理事長が兄弟でここに進学しないか？って勧められてここにしたんだけど……
…受験勉強が大変だった……

「光？聖夜さんの家に行くわよ」

「ああ……」

実は俺も聖夜さんに会うのは初めて……去年は受験勉強で忙しくて会えなかった、今日の入学式が終わったら引越すことになった……

「やあ……明美さんに光くん」

うわあ、すごいイケメン……母さんと同じ40代とは思えない

「さあ……上がって」

「お邪魔します」

家の中は綺麗に整理されている

「あ！ご飯を作りますね」

母さんはスーパーの袋を持ったまま台所に向かった

「じゃあ、その間に光くんの荷物を入れておくか」

「は、はい」

男の大人が手伝ってくれたおかげで早く片付いた。

「すまないが彼方を起こしてくるから先に降りていてくれないか」

「は、はい」

カナタって誰だろう？息子かな？可愛い女の子がいいな……

「母さん？彼方って誰？」

「ああ……聖夜さんの息子ですよ」

息子……女の子じゃないのか？……残念

少しすると聖夜さんがその後ろから俺と同年と思われる美形が降りてきた……肩に着くくらい長い明るい茶色のサラサラの髪に蜂蜜色の綺麗な肌に締まった無駄のない体型、綺麗に整った顔は今是不機嫌そうに眉に皺を寄せてこつちを睨んでいる……
……何か聖夜さんとこそ話しているけど……どうしたんだろう？

「……なんだよ」

あまりにも睨んでくるんで言ってしまった……でも、聖夜さんは気にすることなく自己紹介をしてくれた。

「一応、知ってるかもしれないが自己紹介をするよ、月宮 聖夜…

……………不本意かもしれないがこれから光くんの父親になりました」

「いえ……」

「それは良かった……彼方だと、一筋縄ではいかないからな」

こんなに格好いいし、優しそうな人だし、なにより……………母さんが幸せそうな顔をしているし

「この子は明美さんの息子で光くんの弟になる彼方だ、愛想が悪いがよろしく頼む」

「いえいえ、こんなに格好いいお兄さんができて嬉しいよね」

「……………はい」

「……………あつそ、じゃあ、明日も学校だから寝るよ」

彼方が部屋に上がって行つてしばらく沈黙が続いた……

「やれやれ、まあ………こうなることは予想していたが」

「……………あの、私、何か気に障ることをしましたか？」

「……………昔は素直な性格だったんだがな、嫌いというよりは戸惑っているだけだ、しばらくすれば落ち着くだろう……………光くんも早くご飯を食べて寝なさい、今日は疲れたろう」

俺達にご飯と風呂を済ませて寝ることにした

「ふあゝ」

あの馬鹿が来る前に学校に行くか？…………俺は洗面所で顔を洗い制服に着替えて家を出ようとした。

「あ！彼方くん！！起きたの？待っててね、今から朝ごはんを作るから……」

「いい……………いらない」

「え？ちょ……………」

俺は人通りが少ない道路をゆっくりと歩いた…

「朝早いですね、月宮くん」

「なんだ、小さいの……」

適当にコンビニで買ったご飯を買って教室で食べていると最中に隣の席の小さいのが教室に入ってきた

「小さいの………って、僕のことですか？」

「それ以外にこの教室に人がいるか？」

「そうですけど………あのちゃんと鳴海ナルミ 優ユウって名前で呼んでほしいんだけど」

めんどくさい………クラスに1人はいるお節介か？

「はいはい………小さいの………もとい、鳴海…何か用か？」

「いえ……」

鳴海も朝ごはんはまだらしく隣の席でコンビニの袋からパンとオレンジジュースを出した。

「なあ……」

「なんですか？」

「ひとつ聞いていいか？」

「なんですか？」

鳴海は自分に興味を持ったことがうれしく明るく口調で了承した。

「……お前って女か？」

「……男です、今は冗談でもひどいです」

んなこと言われても……あからさまにへこんでるな

「本気だが？」

「なんで女の子と見間違うですか？」

「細いし、小さいし、色白だし、声高いし、肌はぷにぷにしてるし」

まだまだあるが全部言ったら泣きそうだからやめとくか

「月宮くんも女装されたら女に間違われますよ……」

「まっさか」

中性的だとは思っけど………てか、鳴海って女に生ま
れたほうが良くない？

「……………今、失礼なこと考えていませんか？」

「気のせいだよ」

..... 変に勘がいい、ほんとに男か？

「..... まあいいです、月宮ちゃんと話せたからいいです..... なんか、からかわれただけの気がしますが」

「..... 細かいことばかり気にしているとまた女に間違われるぞ」

「うつ..... 気をつけます」

扱いやすいな..... 彼女を作るならこんな感じに子がいな..... とくだらないことを考えていたせいか後ろにめんどくさい奴が近づいていることに気がつかなかった。

「でえ.....」

頭が机にダイブした..... 俺が後ろを振り向くと不機嫌な光が俺を見下ろしていた。

「朝ごはんも食べずに勝手に学校に行きやがって……………母さんが心配してたぞ」

「知るかよ……………大体、一緒に行く約束なんかしてないし……………それ以前に同じ高校だって知らないし」

「白井くん、おはようございます」

「優じゃん…まさか、彼方と同じクラスか？」

白井って誰？

「白井？」

「白井 光くんです……………僕と同じ中学だったんですよ」

「こいつの母親、再婚して名字が白井から月宮に変わったはずだろ？」

「月宮ちゃんと月宮く……………あれ？」

「俺と彼方は兄弟になりました」

俺の肩に腕を回しながら光はピースする光……………なんとなくその腕を解く気にはなれなかった。

「それはおめでたいですね」

「ほら、鳴海がてめえの頭はおめでたいな……………って」

「んなこと言っていないだろ……………彼方はいつもこんな感じかよ?」

「いえ、僕も昨日初めて会ったばかりです」

朝からうるさいな…………

「月宮くんは家でもこんな感じですか?」

どっちを呼んでるんだか

「優…………どっち呼んでるかわからないから名前で呼べよ」

「……………」めんなさい」

「白井くんとは昨日の夜、親から初めて紹介されたからお互いのことはよく知らないだよ」

「彼方まで名字呼びなんだよ」

「細かいこと気にすると女に間違われるぞ」

「そんな変なこと言われても誤魔化されないぞ……………」ちゃんと優と俺を名前で呼べよ?」

面倒くさい……………こんなのは付き合いたくないな

「どうでもいいけど、早くクラスに戻らないと遅刻するぞ?」

いつの間にか教室は人に溢れて騒がしくなっている

「やべ……………」じゃな、帰り来るから待ってるよ…彼方」

「来なくていい」

なんで朝からこんなに騒いだんだろ？

「……………彼方くん？」

「どうかしたか？」

「いえ…気のせいだと、思うから気にしないでください」

気にはなつたが朝早く来たせいかわ魔が襲ってきたので寝ることにした。

「彼方……いつまで寝てるんだよ」

「うん」

もうこんな時間か？……さすがに寝すぎた、HRが終わると同時に帰るつもりだったのに…

「……なんか用か？」

「用か？……じゃない、今日は母さんたちが遅いから先にご飯食べてろって」

「はあ………帰りにコンビニに寄るか」

「コンビニじゃなくてちゃんとしたの食べたい」

「俺…………この辺の地理は詳しくないぞ？」

せいぜいコンビニか本屋くらいしか行かないしな

「……………材料はあるとは思うが」

「自炊できるのか？」

「……………できません」

「ならコンビニで我慢しろ」

俺はさっさと帰り支度を済ませ家に向かった。

「……………はあ……………」

先からこんな調子でウザいけど……………

「……………はあ……………」

「あーわかりました、作ってやるからウジウジするのやめろ」

俺が根気負けをして作る羽目に……………って作ってやるって言っ
た途端に目をキラキラさせてきたぞ…コイツ…

「彼方は自炊できるのか？」

「そこそこな」

さっきの静かな光はどこに居たのやら……今はスキップでもしそうな勢いで俺の後ろを着いてくる……とりあえず、冷蔵庫の食材を確認したがいつのにか食材が揃ってる……明美さんが昨日買ってたのだらうか？昨日までは何もなかったのに……これなら晩御飯まで持ちそうだ。

「早く！早く！」

鬱陶しい……俺は簡単に焼き飯を作った……できると光は焼き飯をがつついている……

「アチッ」

「……はぁ……作っただけだから熱いのは当たり前だろ」

俺は光に麦茶を渡す……頬を赤らめて上目使いで俺を見る光に何故かときめきを感じていた……俺はそんなのは気のせいだと言い聞かせるように自分の焼き飯に手を着けた。

もう日が暮れ…辺りはもう真っ暗になっている…やることもない俺は彼方の部屋に居る……………来た時に凄い抵抗を受けたけど……………強制的に入ってやった……………

「なあ……………彼方」

彼方は机で紅茶を飲みながら読書してる

「……………なんだ？」

「晩御飯は何？」

「昼御飯食べたからなしだ」

俺は彼方の部屋のベットの上で駄々をこねた。

「育ち盛りなんだぞ」

「…………で？」

あれなんか怒ってない？

「作ってよ、お兄様」

うおい…………視線が寒いぞ

「コンビニに行って来い」

「えゝ光はお兄様の手料理が食べたいの……………うわぁ」

この野郎…………国語辞典を俺の顔面めがけて投げてきたぞ！

「…………ちッ」

舌打ちして国語辞典に傷が付いてないか心配する彼方…………俺の心配をしるよ

「いきなり国語辞典を投げることはないだろ」

「黙るか気絶するかどっちがいい？」

「どっちがいいってどっちも嫌……作らないと彼方の部屋に寝泊まりするぞ」

彼方は頭を掻きながらため息をつく

「……作るから自分の部屋に戻れ」

「いやいや…光は彼方お兄様と遊びたい」

あらあら……眉間にそんなに皺を寄せたら綺麗なお顔が台無しよ？
彼方お兄様……

「………光………」

「なに？」

「……………ウザい…」

……………そんなにストレートに言わなくても

「……………だったら本ばかり読んでないで遊ぼうよ」

「……………はあ…何するんだよ」

「へ？」

「いや、だから何して遊ぶんだよ？」

それは……

「……………考えていませんでした」

「バカ？」

「かも」

いやゝまさか、ここまで自分が向こう見ずな性格だったとは……

「……………はぁ……」

今日何回目になるか分からないため息をついてようやく俺のほうを振り向いた。

「……………明日も午前中だろ？……………その時に適当なところ連れて行ってやるから今日は大人しくしてろ」

「わぁい、約束だぞ、彼方」

俺が彼方に抱きつくとも物凄い嫌そうな顔された。

「はぁ……………ご飯作ってくる」

「俺は彼方のエロ本を探してく」

「……………」

呆れた視線を送ったあと彼方は部屋から出て行った。

「あつたか？」

「いえ……無かったです」

「あつそ」

ちよつと……そんなに汚らしいものを見る目で見ないでよ

「……できたからさつさと食べ」

なんか怒らせた？

「……なあ、彼方……怒ってる？」

「……別に？」

「…………俺さ……一人っ子で友達とか少ないから彼方が兄弟になって嬉しくてさ……だから、その」

「……………わかったからさっさと食べ」

彼方はカレーをテーブルに置いていつの間にか俺の向かいに座ってる

「……………うん!!」

「おかえり」

「ただいま」

お風呂から出てリビングでまったりしていると玄関から義父さんと母さんが帰ってきた。

「どこに行っていたの？」

「……………内緒……………」

「そういえば、ご飯は光が？」

「いや……彼方が……」

彼方……ちゃんと母さんたちの分まで作っていたのか

「彼方くんは料理できるんだ？」

「できるけど……かなりのめんどくさがり屋で滅多に作らないけど……よくあいつに作らせたな」

「いえ……彼方おにざまあ」

お風呂から上がった彼方にいきなり後ろからタオルで叩かれた。

「その気持ち悪い話し方はやめろ」

「やん……明日がデートだからって照れちゃって」

「行きたくないなら」もちろん…行くぞ」

彼方は迷惑そうに眉をひそめて自室に入った。

「ずいぶん仲良くなったじゃないか……………あのよく無愛想とこんな短期間で」

「いや……………それほど……………」

「……………やっぱり男の子同士だと打ち溶けやすいんですか？」

「……………というよりは光がかなり打ち溶けやすい性格なんだろ……………
…あいつも光を見習えばいいんだが」

徐々により雰囲気になり始めてきたので俺も自分の部屋に退散することにした。

おかしい…………なぜあんなことを言ったのか分らない…

「彼方くん？」

なんかあの時の光の顔が忘れられな…切なげで悲しそうな顔が忘れられない…………俺に相手されなくなったあいつの顔を見るとつい……………
……………なんだろ……………そんな顔させた自分が無性に許せなくて……………そんな顔を見たくなくなつて……………

「……………」

一緒に遊ぶ約束をしてしまった……………別に破ればいいだけの話だが……………約束をした時の光の顔がチラついて心を締め付ける

「……………」

「……………なんだよ」

さっきから優の奴が俺をじっと見つめてやがる

「……………光くんのことを考えてましたね」

「……………寝言は寝て言え」

図星だが認めるのは死んでも嫌なので減らず口を叩いてみる

「光くんが嬉しそうでしたよ……………彼方くんが今日、一緒に遊んでくれるって」

「……………あの馬鹿から聞いたのか？」

「ええ……………あんなに嬉しそうな光くんは初めて見ましたよ」

「へえ……………てつきり俺はあいつはいつもバカみたいに明るい奴と思っていたけど？」

優は首を傾げる。

「僕が明るい光くんを見たのは彼方くんと出逢ってからですよ」

思わず口を閉じてしまった……………なにか引つかる……………自分の気持ち、光のこと……………そして再婚のこと……………背中の痒みに手が届かない似たあと少しで分りそうで分らないもどかしさ……………近くにあるのに届かない……………もやもやだけが残る

「かーなーた、迎えに来たぞ」

教室の入り口で大声で俺を呼ぶ光

「うるさい」

「ははは…」

苦笑する優に手を挙げて教室の扉の近くで待っている光に近づくと
光のほうも嬉しそうに近づいてくる

「……………どこ行くんだ？」

「ゲーセンだ…本屋に行きたいけど……………お
前は活字を読む習慣なんかないだろうし」

「……………もしかしてバカにしてない？」

「もしかしなくてもバカにしてる」

「むう」

頬を膨らませて俺を睨む光……………俺の胸にはときめきや愛情
と言った色めいた感情はなく相変わらず騒がしい光に苛立ちを覚えていた。

「うわぁ……こっち来た」

「ちッ」

ドドッ……

「サンキュー彼方」

「お前……下手すぎ」

家と学校の間にあるデパートのゲーセンでガンシューをしているが
光の腕のおかげで緊張感溢れる戦いを繰り広げている最中………

「うっおい」

「ちッ……とどめだ」

ドドン……鈍いボスが倒れる……どうやらラスボスらしくエンディングが流れる……かれこれ二時間近くこのゲーセンにいる……いい加減に疲れてきた……光に次はどこに行くか尋ねようとするが俺の近くに光がいつの間にか居なくなっている……どこの学校も午前授業らしく制服姿の学生が多い、なかにはカップルもいる……というかそれ以外が少ない……まだゲーセン内にいるだろうと辺りを見渡すが近くに光の姿はない……人が多いせいかなかなか見つからない

「ねえ……君って独り？」

あーうかつに遊びに行こうなんて言わなければ良かった……よく考えなくても入学式シーズンのこの頃……大抵の学校が午前授業なはず……なら自然と新しくできた友達かもしくは彼女は彼女……または同じ高校に通うことになった中学の友達と遊ぼうと人が多いのは当たり前なのに……

「ねえ……」

しかもこの辺の地理が疎そうな光と合流するのは多少骨が折れる……

…好奇心旺盛そうな光のことだ、大人しくいつまでもゲーセンにいるとは思えない……あっちこっち移動する前につけないと…

「ちょっと!」

しかし……今時、ゲーセンくらい珍しくないのにあのバカははしやいで……俺はこんな人が多いところが苦手なのに……そうだ、あのくそ親父になんか買って貰おう……ほしい本がたくさんあったんだが金欠でどうしようかと悩んでいたがくそ親父も光を出されたら断れないだろう……なかなかいい案だ、そう考えれば疲れと苛立ちが和らぐ……いや、いつそのこと親父と明美さんの仕事が終わるまで遊んで夕ご飯を奢らせるのも悪くない…………こう見えても甘いものが好きな俺が一度は食べたいと思っていた洋菓子店がこの近くにできたんだ……高くて手が出せなかったが折角の機会だ、しかもあの親父の奢りとくればより一層おいしく感じるはずだ……

「ちょっと、待ちなさいよ」

やれやれ……大声を出してはしたない……そうやって、揉めるのは人がいないところでやってもしいものだ……

「だから、待ってて言ってるでしょ！！その茶髪！！！」

茶髪？……………もしかして俺か？

「……………なんだ？」

「さっきから人をシカトして……………」

だっていかにも派手なメイクに香りのキツイ香水……………遊んでそんな女は苦手なんだよね

「悪かったな……………で用は？」

「これから暇？」

逆ナンか？……………さて……………どう返そうか？

「これから両親と待ち合わせしてるから暇ではない」

無難だな……………これなら相手もおとなしく下がるだろ、打たれた

り泣かれたりするのには面倒だし

「でも……」

「弟と来てるから親が来るまで面倒を見ないといけないから……
悪いな」

「また今度ね？」

相手はそう言うのと渋々友達のところに行った……さて光を探すか
って近くにいたが……どうやらクレイゲームに夢
中のような……これは取るまで終わりそうにないな……俺
は少し離れたところでその様子を見ていた

「……………」

「……………」

かすってすらいんだけど……この調子だと、いつまでも終わ
りそうにないな……はあ、光がお金を使い果たす前になんとかしないと
な……俺は隣でさつき光が狙ったぬいぐるみを狙った……クレ
イの握力が弱くってグラグラして落ちそうだがなんとか持ちこたえ
た……

「はい……」

「はい？」

ポカンとしている光……しばらくしてぬいぐるみと俺を交互に見た……

「なんでいるんだよ」

「それはこっちの台詞だ……どこ行っていたんだよ」

「ここで遊んでた」

「……いくら使った？」

「……………2千円」

遅かったか……………

「ちょっと、待て」

「なに彼方？」

「い飯はどつする？」

「あ……」

こいつ……………バカか？

「……………こうなったら親父たちの仕事が終わるのを待つしかないな」

「母さんと義父さんの仕事場ってどこ？」

「明美さんは知らんが親父の仕事場はここから近くにあると思う」

「なら母さんの仕事場も近くなはず」

「なら、連絡して合流しよう……お前に振り回されたあげくご飯まで奢るほどお人よしではないぜ……俺は……」

「おう」

この貸しは高いぞ……親父……とりあえず、これからどうするか決めるか。

「……で、これから、どうする？」

「うーん、どうしよう？」

「明美さんって何してるの？」

「最近できた洋食店で働いてるって言うた」

「ふーん、あそこか……じゃ、そこに行こう……」

お前の相手して疲れたからな」

最近できたって、ことは……………俺は家に来たビラの中にそれらしいものがあつたことを思い出していた

「……………ごめん」

なんか妙にしおらしい光……………これは、これで調子が狂うな……………

「まあ、いいさ……………折角だから奢れよ?」

俺達はデパートを後にして春とはいえ、夕暮れ時はそれなりに冷え込む……………隣で身を震わす光にマフラーを渡し、騒々しい商店街を歩きだした。

「……………ふう」

まだ4月の初め……………吹く風が冷たいはずなのに寒くは感じない……………俺は紙袋に入っている不細工なアニメのぬいぐるみを見て苦笑する……………彼方とはぐれてしまって……………見つけた時には女子高生に逆ナンをされていた……………俺といえる時はなんか終始、退屈そうで無表情だった……………彼方は格好いいからモテるだろうし、今まで仕方なく付き合っている俺といえるより彼女を作って、遊ぶほうが彼方にとって幸せだろう……………そう思いクレイニングゲームに意識を無理やり集中していた……………何度、やつてもぬいぐるみは取れず……………いつの間にか使った金額は2千円を超えていた……………隣のところで何か落ちる音が聞こえた……………それと同時に俺にぬいぐるみが渡された……………あまりに突然でびっくりしたけど、まさか、彼方が隣で見ていたとは気がつかなかった…………………………どうやら、俺がぬいぐるみをほしがっているみたいと勘違いしているらしい……………さすがに2千円使ったって聞いたなら呆れていた。

「おい、はぐれたらお前置いて帰るぞ」

「う、うん」

顔だけを俺に向けて話しかける彼方…… 俳優もは裸足で逃げ出し
そうなくらいに整った綺麗な顔で通りかかる女性はもとよりなかに
男の人でさえ振り返ってしまうほどの格好がいい……………

「おい……………」

「なに？」

「お前一人でどこに行くつもりだ？」

「へ？」

どうやら、考え事している間に着いたみたいだ……………

「……………ごめん、少し考え事を……………」

「別にいいけど……………入るぞ」

「うん」

俺は彼方のマフラーを強く締め直し店内に入った。

「いらしゃ……………」

「どうも……………」

「……………」

母さん……………ビックリしてるよ

「あ……………ああ、いらしゃいませ」

俺達は窓際の案内された席に座った、テーブルに置かれたメニューに目を通した。

「何にするか決めたか？」

この洋食店の店長らしい男性の人がオーダーを取りに来た……..
…気さくそうで話しやすい人だな

「シチューで」

「お、俺はグラタンで…」

「……っと、煎れたてのコーヒーがあるが飲むか？」

「いいんですか？」

「ああ…」

「いただきます…彼方は？」

「俺はいい」

「じゃあ、すぐ持ってくるな」

相変わらず無愛想な彼方……

「今の人……………店長かな？」

「店長だろ、名札にそう書かれていたし」

「へえよく見てるなあ……」

「はい、じゃあ、ゆっくりして行けよ」

店長はコーヒーを置いて次のオーダー取りに行ってしまった…

「いただきます」

……………にがっ

「……………おい」

どうやら、すごい顔になっていたらしく、彼方が呆れたような声を出した。

「……………はあ、なんで飲めないものを…」

「だって、こんなに苦いなんて思わなかったんだよ」

「仕方ないから、紅茶でも頼め」

「でも、折角作ってくれたのを…」

「はあ……………俺が飲んでやるよ」

彼方がコーヒーを一口飲む……………俺が飲めないほど苦い
コーヒーを涼しい顔で…

「むう」

「……………なんで、拗ねてるんだよ」

「あはは……………光は苦いの駄目だからね」

いつの間か母さんがシチューとグラタンを持ってきていた……………

「なら、最初から頼むなよ」

「だって断ったら子供みたいだろ？」

「その辺は安心しろ、クレーンゲームで2千円を使った時点です
で子供扱いから」

「……………はぁ…もしかして、それって光が取ったの？」

母さんは呆れながら紙袋を見た。

「うつん、彼方が……………」

「彼方くんが？」

「そのせいで有り金使い果たしたとき」

「……………だから、ここに来たの……………聖夜さんももうすぐ来
ると思うからゆっくりしてね」

そう言って母さんは職場に戻った

「……………」

「……………」

会話が途絶えて息苦しい…

「ねえ…」

「なんだ？」

「彼方は彼女はいるの？」

「いや、俺モテないし」

嘘！？こんなに格好いいのに？

「そういう光は？」

「俺もあんまし」

「ふん？」

興味無さそうな顔で唸る彼方……………また会話が無くなっ
たし

「よ！お二人さん、待ったか？」

「いえ」

「……………」

「ごめんなさい…もうしばらくかかるから」

「せっかくだからショッピングモールで買い物してくるよ」

義父さんは俺達の会計を済ませて車を回してくれた……俺と彼方は車に乗り込みネオンの光が車に少し入ってきた、人混みに慣れていないせいかな少し疲れ気味な彼方の顔を薄く照らしてどことなく切なく見えた……

「……………あの野郎……」

義父さんは低い声で唸った……………それもそのはず……………彼方は欲しかった本を買ったんだけど……………

「すみません……」

いや……………あれは見事な駆け引きだったね……………値段を聞いて渋った義父さんを鮮やかに手口で払わせて……………まさか俺も義父さんも今日のことを引き合いに出すとは……………まさに策士だね

「いや、あれがこのくらいで素直になれば安い買い物さ……」

とはいえ、トータル2万も買わされたらさすがに……

「ごめんなさい…待たせてしまつて」

気まづくなりかけたところでお母さんがやって来た。

「いや……大丈夫ですよ………ぐえ？」

彼方が義父さんのネクタイを引っ張った。

「なんだよ」

「あれ、奢れ」

あれって…

「ケーキ？」

いかにも高そうなケーキが並ぶ洋菓子店

「ダメだ」

「うん？もしかして彼方くんはこのケーキを食べたいの？」

「うん」

「私の学生時代の先輩が店長をしているの……さあ、何がいい？」

お母さんは店内に彼方と入った………それまで呆気に取られていた義父さんが慌てて止めに入った。

「ちよっ…いくらなんでもこんな高そうな所の…

「大丈夫ですよ……それに先輩には聖夜さんのことも色々相談に乗ってくれましたし」

お母さんは義父さんとの結婚に消極的だった……理由は2つ………まず1つは俺という息子の存在……お母さんと彼方がよくても俺と義父さん……そして、彼方との関係が良好的になるか不安だった………自分とはもかく、自身の勝手で彼方たち親子の関係にひびが入るのではないか？もしくはそれで俺と彼方の人生に悪影響を及ぼすのではないか？親にとっては良くても子供から見れば、いきなり他人と家族になるのだからやはり躊躇ってしまう……お母さんは俺たちに自分の都合で人生を滅茶苦茶したくは無かった、親として自分の価値観を押し付けて“光”と“彼方”という子供の個性や感性を潰したくなかった………別に自立してからでも愛があれば結婚

出来るから……………と……………2つめは金銭的な理由……………高校生まで
になると何かとお金がかかる、大学まで上がるとなるとなおのこと
……………彼方の学費だけでも結構かかるはず……………進学校ならなおさ
ら……………都合の悪いことに義父さんたちが住んでる所は近くに通える
高校が少なく、紅夏高校が近くにあるだけなので自然と俺もそこに
通うことになる……………さすがに俺も諦めかけた

「光は何がいい？」

「うーん」

彼方があまりに乗り気では無かった……………そこに母さんは悩んでい
るようでこれからの生活が不安だ

「彼方くんはなににする？」

「このフルーツタルトにブルーベリーケーキとチーズケーキと……………」

「まだ食べるのかよ」

「……………」

「……………」

「いやぁ……………彼方が目で『空気読め』って言うのが言葉なしで伝わる
……………いやぁ、お見事

「あらあら……………育ち盛りだから仕方無いよね、会計を済ましてくる
わ」

「……………」

「うわぁ……………今度は『ほらほら、女性に払わせる気かよ、新しい家族と
仲良くできるようにここは男を見せろ、この甲斐性なし』って聞こ
えるよ、ダイレクトに……………いや、直接言っただけに凄いな
……………って、義父さんの手が震えてるし……………」

「……………私が払いますよ」

「え? いいんですか?」

「……………はい」

うわぁ……義父さん……今日だけでいくら使ったんだろう？……
……って、彼方がガッツポーズしてるし、仲がいいか悪いか分からない親子だな……

「彼方………」

「なんだ？」

「やり過ぎ」

「気のせいだろ？」

俺の批判を軽く流して、ケーキの入った紙袋を受け取った彼方……
……まあ、今日1日で俺と母さんと彼方の距離が短くなった気がするから強くは言えないけど……外を見ると眩しくらいに光るネオン……俺たちの家庭もこれくらい光輝けばいいな……なんて、
日頃は眼が眩むくらい光るネオンを見ながら俺の世界も徐々に代わりはじめていることを自覚した。

「そういえば、今日の午後は野外自習の部屋決めですって…」

入学式から早くも2週間が経った……今クラスでは4月の終わりにある野外自習の話題で持ちきりだった、どこの子と同じ部屋になるかは年頃の高校生には重要で趣味が近い人やもしくは顔のいい人などが集まりやすい……顔のいい人がいると好みの異性を呼ぶときに便利だからな……将を射るには馬からってか？

「……………で？」

「……………ですから、一緒に部屋にしませんか？」

優は俺が高圧的に出たのでおどおどしながら聞いてきた……………まあ、確かに優は無難かな？静かだし、扱いやすいし、それに下手に違う人と一緒になるのは面倒だし……

「いいぞ」

「いいんですか？」

「悪いかな？」

「いえ、こんなに簡単にいって言うとは思わなかったから」

「まあ…お前と一緒にのほうが楽しそうだからさ……………で、確か四人一組だったよな？……………あと二人はどうする？」

「うーん？5限目の時に決めませんか？他のクラスの人も来ますし」

「そうだな」

俺たちは体育館に向かった。

「……………?」

体育館について先公どもの長くてつまらない話が終わり部屋決めに
なったが……何故かさつきから睨まれている……………気がする。

「そうだ！光くんと一緒になんてどうですか？」

ちよつと、待て、どうやったらその結論に行き着くんだ？

「それじゃあ、俺は家に居るのと変わらないだろうが！」

「あれ？彼方じゃん？部屋は決まった？」

「……………まだだが？」

なんで、こんなときに出てくるんだよ

「そついう光くんは？」

「1人は決まったからあと2人」

「僕たちもです」

「じゃあ、一緒の部屋にしないか」

「いいですけど…」

優は俺を見て気まずそうな顔をする。

「……………はあ…好きにしろよ」

あからさまに不機嫌な俺に光は頬を膨らませた。

「むう…彼方は野外自習が嫌いなのかよ？」

「お前と一緒に行くのが嫌なんだよ」

「……………そんなに俺と一緒にが嫌か？」

「それ以前にそれじゃあ家に居るのと変わらないだろうが!!」

「それはそうだけど……………」

「どうせ、いつも見たいに面倒を起こすのだろうが！」

「それはまるで俺がトラブルメーカーみたいじゃないか」

「まるでなんでもそうだろう？」

「なんだと!？」

俺達が言い合っているとなにが面白いのか優がクスクスと微笑んでいた。

「なにがおかしい？」

「あ!ごめんなさい、彼方くんがこんなにむきになるなんて…」

「なってねえよ」

「いつも教室では一匹狼を貫いて僕が話しかけても一言で片付けるのに…」

確かにクラスに居るときは滅多に話さないけど……

「彼方は無愛想だからな……………俺が居ないとダメなんだな」

得意気になる光の顔に凄い腹がたつ……

「……………居ないとダメになるのは光のほうだろ？」

「あはは……………そうかも」

無邪気に笑う光……………はあ……………黙っていれば美少年なのに……………

「……………で、さっきから俺は睨まれているのは気のせいかな？ 凄い殺気が感じるんだが……………」

「え？」

俺は睨んでるやつを指差した、優は慌てて振り向いたと同時に驚いたような声を出した。

「朔！？そんなとろでなにしてんの？」

「誰だそいつ？」

「俺のクラスのやつで一緒の部屋の人だよ」

「へえーそいつは御愁傷様だな」

「……………どういう意味だ？彼方？」

「意味通りだよ……………でなんで、俺は睨まれたんだ？」

優は頬を赤らめた。

「ええとそれは……………」

おろおろして俺と光を交互に見た、そんな優を余所に俺を睨む朔……リアルに居るんだな……………

「…なるほど、大体分かったよ……………俺は月宮 彼方……………優の友

達……一応、光の兄貴だ……であんたは？」

「ナクラ名倉 ハジメ朔……光と優の友達……」

「え？何が分かったの？彼方？」

こいつはバカだな……

「……………気にするな、多分……………」

俺は優の顔を見た……………顔を赤くしたかと思うと青くしたりとびくびくしている……………

「で……………このメンバーで異論はないか？」

「僕はないよ」

優は話が逸れて安心したように同意した。

「？」

「……………で……光は？」

「いいけど、何が起こったのか分からないけど……」

「お前は一生分からないから安心しろ……で、名倉は？」

「……ああ……構わない」

いや、そんな険しい顔で言われても……顔がいいだけに怖い……

「大丈夫かあ？このメンバーで？」

「大丈夫ですよ……多分」

このあとはその場で解散になって帰ることになった、一緒に帰ろうとした光をおいて行ったら校門前に見つかった……そのあと散々愚痴られた……今日は明美さんが休みだったから晩御飯を食べて風呂に入って自室でゆっくり紅茶を飲みながらこの前買った本にウトウトしながら目を通していた……もう少して11時に変わるとき黒い携帯が震えた。

「はい……」

『カナター』

人の鼓膜を破るつもりなのかいきなり大音量で出た恭…………俺は素早く電話を切って机の上に置いたあと、ひとくち紅茶を飲んだあと再び本に目を通した…………すると30秒もしないうちに再びかかってきた。

『彼方…………いきなり切るなんて酷い!!』

「うるさい、用件を述べてさっさと寝ろよ…………いや、いつそのこ
と切ったあとでメールしろ、じゃな」

『むう…彼方、最近冷たい……………最近是一緒に学校に行ってくれな
いし』

「それはお前が部活だからだろ？」

『じゃあ、部活が無かったら一緒に行ける?』

「……………」

『黙らないでよ…………もつ』

「用件がそれだけなら切るぞ」

『待つて…野外自習の部屋……………なんで勝手に決めたのさ』

こつちが本題か…

「それはお前はウザイし、友達に変なのが多いし…何より約束してないし」

『うわぁ〜ん、彼方と野外自習で愛を育みたかったのに』

なんでお前と……

「諦めろ……………」

『酷い』

「仕方無いだろ？もう決まっただんだし」

『むう〜彼方はドライだね』

「いい加減に眠いから切るぞ？」

『彼方のいけず』

携帯を問答無用で切る……光といい、恭といい、俺といて何が楽しいんだか…恭と久しぶりに話して疲れた俺はベッドに入るとすぐに眠りについた。

「彼方！！起しろ！！！！」

あれからあつというまに野外自習当日……光が昨日から浮かれてる

のは理解できた……がまさかこんなに早く叩き起こされるとは……

「うるさい」

「早くしないと遅刻するぞ？」

今何時……まだ6時だろが……このペースで行くと1時間前に学校につくぞ。

「はぁ……じゃあさっさと朝御飯を食べるぞ」

俺たちはリビングに降りた。

「おはよー」

「はよ…」

「おはよう…随分、早いな」

「おはよう、確かに彼方くんはともかくとして」

「むう」

こんなことで拗ねて頬を膨らませるなよ。

「……………御飯はまだか？」

「今入れるわ」

お味噌汁に玉子焼きに納豆に玄米と漬物……………朝からこんなものをよく作れるな……………俺だったら光とお父さんのために朝御飯を作るとしてもパンと目玉焼きが限度だな……………

「いただきます」

「いただきます」

俺たちは明美さんが作った朝御飯を食べた。

「俺、顔洗ってくる」

「では、私もそろそろ会社の時間だ」

いつもと違い朝でも元気な光……………何故かニヤニヤして仕事に行つた
たくそ親父

「そついえば……………今日だったからしら？野外自習」

「ああ……………」

「楽しみ？」

「いや、光と同じ部屋だから家に居るのと変わらない」

クスクスと笑いながら俺を見る明美さん

「全く、俺といて何が楽しいのかが全然分らない」

「あはは……………彼方くんは人を引き付ける何があるのよ」

「ないよ……………それにあれに好かれても嬉しくない……………三泊四日
……………大人しくしていればいいが……………今から先が思いやられる」

「ふふふ…あの子は彼方くんが大好きだからね、仲良くしてあげて」

「つまり、あいつの子守りをしろと」

「あの子が子供っぽいじゃなくて彼方くんが大人っぽいのよ…」

うーんと唸っていると顔を洗い制服に着替えた光がいた。

「彼方も早く準備しろよ」

いつもはお前のほうが遅いだろうが…と思っているといつの間にか部屋に上がっていた……

「はぁ…やれやれ」

俺はため息を吐きつつ洗面所に向かった。

「彼方！準備できたか？」

「できたぞ…行くぞ」

俺は手早く準備を済ませた…………俺のカフスを引っ張って催促する
光……

「いつてらしい」

「行つてきます…」

「ああ…行つてくる」

朝の澄んだ空気の中を慌ただしく俺たちは駆け抜けた…

「あーみんな遅くないか？」

「俺達が速く来たただけだ、この無計画野郎」

…予想通り1時間前に学校に着いた俺達は誰もいない校庭にいるのは寂しく二人だけ……

「優に名倉…早いな」

「彼方ちゃんと光くんも早いですね」

「……………光が朝から騒いで早く来たわけ……………優たちは？」

「僕たちは家がこの近くなんで」

「へえー」

「…………で、お前らはどうして？」

「光が張り切って早く着いたんだよ」

「月宮と光はなんで一緒にいるんだよ」

あーそこから説明しなきゃいけないのか…

「俺と光の親が結婚したんだよ…」

「ふーん？」

「……………というか、お前らってどういう関係？」

「俺と朔と優は幼馴染みなんだぜ」

優と名倉は違うみたいだけど…俺達是他愛ない会話をして時間を潰した。

「うわぁ…ぷにぷにしてる…」

バスの中で俺の隣に無理矢理座った光を無視したら、何故か俺の頬を突っついてきた。

「……………なにしてる？」

「いやぁ…彼方の肌綺麗だな…って思ったら触りたくなっただんだよ」

「……………ウザイ、止めろ」

「えーなんで？」

「野郎の頬を突っついて何が楽しい？」

「むう…彼方がさっきから俺のこと、無視するから悪いんだよ」

あーなんで、俺がこいつにかまわないといけないんだ？

「はいはい……」

相づちを打って窓に目を写した……

『A組の月宮 彼方とB組の月宮 光……イチャイチャするのは結構だがゲームに参加してくれよ』

「やん…恥ずかしい」

担任と光の戯れ言をスルーして目を閉じた。

「……………」

『コラ！彼方！！寝る体制になるな！！！！全く、少しは弟を見習って感情豊かになれ』

「うざい……だから、彼女に捨てられたんだろ」

『ぐすっ……どうせ、俺は彼方みたいにイケメンじゃないですよーだ』

『うるさいです… A組の皆さんにはこんな担任で同情します……さて、ビンゴゲームの続きをしますよ』

光のクラスの担任に止めを刺された俺達のクラスの担任は席で膝を抱えていた……ぐらぐらとバスで二時間くらい揺られてホテルに着いた……木が鬱蒼と茂っている

「でけえ……」

「ほら、呆けてないで入るぞ」

「待つてよ」

速足で歩く俺の後ろを慌てついてくる光……割り振られた部屋の前で優達と合流した……部屋の中はリビングにキッチンと個室が2つ……優と名倉、俺と光で使うことになり初日は片付けで終わった、2日目は一年生全員でカレーを作るらしく、キャンプ場に集まって説明を受けた……優と名倉は米を炊きに、俺と光はカレ

ーを作ることにした。

「……………なあ…なんか、見ている俺が不安を覚えるんだが？」

「やだな、彼方は心配性で」

かなり包丁を持つ手が震えてるのは気のせいかな？

「無理しないでジャガイモとニンジンと玉ねぎの皮を剥いてろ」

俺は光から包丁を取り上げて代わりにピーラーを渡した。

「くくくくくく」

「……………楽しそうだな？」

鼻唄を歌いながら野菜の皮を剥く光に思わず聞いてみた。

「うん？……………こういうのって後ろ向きな気持ちでも疲れるだけだろ？」

「まあ……そうだな」

「彼方は何でもできるからつまらないかも知れないけど、何かできないことができるようになると楽しいだろ？」

「俺だって何でも出来るわけじゃない」

俺は鶏肉を一口サイズに切って、光の剥いたニンジンを切った。

「あはは…そうだな、でも、彼方とこんな風に話せるし、それに大人になった時に何も振り返る思い出がないと悲しくない？」

俺に微笑む光

「はあ……ぐたぐたな思い出が増えそうだな？」

「……………」

優達は何故か固まっている。

「……………なにしてる？」

「いや……まさかな？……なあ、コイツら」

「どうだろう？……僕も多分、朔と同じことを考えてると思うけど……」

「だから、何が？」

「まあ……気にするな」

「なんか、意外とね」

なんか歯切れが悪い。

「ううう………」

何故か涙目の光……手には玉ねぎが……

「玉ねぎで泣くってベタなことしてんじゃねえ……」

「ううう……目に染みる」

涙目で俺を見上げる光……顔に熱が集まる……

「俺が代わりにやっておくから顔を洗ってこい」

俺はハンカチを渡した、光は水飲み場に小走りで走って行った……
…その後ろをボーッと見ていた。

「どう思う？ 朔？」

「見ての通りだろ？」

「彼方くんなら任せていいかな？」

「何が？」

俺は光が剥いていた玉ねぎを剥きながらこそこそ内緒話する二人に
尋ねた。

「逆に聞くけど、彼方くんにとって光ってなに？」

「手間のかかるやつ」

優と名倉が顔を見合せ肩をすくめた。

「手間のかかるのは彼方も一緒みたいだね？」

「やれやれだな」

「ふう〜スッキリ」

玉ねぎをみじん切りにして切った具材を炒めた……優達のご飯も順調に炊けてきた……俺は光と他愛ない会話をしながら具材を煮詰めてルーを入れた……カレーがいい感じになった頃にちょうど、優達のご飯が出来上がった……俺達のカレーはそこそこのできだった。

「いただきます」

「……………」

「コラ！彼方、無言で食べないでちゃんと会話に混ぜられよ」

「んなこと、言っていないで気をつけて食べるよ…」

「はいは、チャー!？」

「はあ……前にもこんなこと無かったか？」

俺は水を光に渡した、『えへへ』と上目遣いで俺を見る光……中身は駄目でも見た目が良いからそこら辺の女子が顔を赤らてる……

「はあ……」

「ため息を吐くと幸せ逃げるぞ」

「お前と出逢った時点で光並みの速さで遠ざかって行ったから安心しろ」

「ひどっ」

不本意ながら他愛ない会話に参加しながらカレーを食べた、食器の後片付けなどをしてっているとあっという間に入浴時間になっていた…

…俺達は着替えを準備して大浴場に向かった。

「こんなに広いならみんなが入ったほうがよくない？」

「風呂まで一緒だと、さすがに疲れるだろ？」

「そんなもんか？」

「それより、名倉はともかく…意外と光に筋肉が付いてるのはなぜだ？」

ゴツゴツしてる訳ではないが引き締まった綺麗な肉付きをしている

「光くんは朔と一緒に武術を習っているんですよ」

「意外…：だたの馬鹿としか思っていなかったから」

ぷぷと顔を膨らませる光…

「月宮……：光は普段はああでもスポーツはかなりできるぞ」

「野生の勘ってやつか？」

「ふたりしてひどい……それと彼方と朔はなんかそよそよい……ちやんと名前で呼べよ」

「わかったよ……光」

ゆつくりと湯船に浸かって、1日の疲れを取った………体を綺麗にして今日は早く寝た………2日目は勉強と森林浴を楽しみ3日目は基本的に自由なので何故か、俺達の部屋で王様ゲームすることにしました。

「……………」

「彼方……スマイル、スマイル……」

「なんか、月宮くん……機嫌悪いね？」

「別に？」

俺は差し出された棒を引いた……………

「いえーい、私が王様よ…三番と二番がディープキス…！」

いかにも染め上げた茶色い髪の子は何故かテンションを上げた……………
大人しそうな黒い髪の子は自分でないらしく、ほっとしている……………
…俺は三番……………

「あ…俺が二番だ」

光が二番……………ってことは……………

「おい、その茶髪の子……………表に出ろ」

「ちょっ……………彼方くん!？」

「……………彼方が三番か……………」

「月宮くん……落ち着いて」

女はガタガタ震えていた……

「まあ……そいつはどうでもいいが……キスしないのか？」

「どうしてもしないと駄目？」

何故かそこは満場一致らしく光以外のみんなで頷いた。

「仕方ない……光……少し目を瞑れ」

光はゆっくり目を瞑った……俺は光を抱き寄せて優しいキスを落とした、わずかに開いてる光の歯の隙間から舌を入れた……

「……ん？んん……くっ」

舌で歯列をなぞった……光がビクツと震えた……俺は光の頭を掴みキスを深くした。

「……はぁ……くる……はぁ……しいよ……かな……た……んん」

俺は光の柔かい舌を絡めた……深く絡めたり、逆に弄んだりした……俺が舌を離すと物欲しそうに俺の口内に光の舌が入ってきた……必死に俺の舌を探す光の舌……俺が絡めてやると必死に絡めようとする光の舌……光の口から唾液が零れる……俺はゆっくりと口を離れた……光の口から俺の舌が出る……光の舌は逃がさないと言わんばかりに俺の舌を絡めようとするが届かず、名残惜しそうに引っ込めた。

「……………ッ…大丈夫か？」

「う、うん」

光の顔は紅潮して息を切らしている……………俺の軀が疼く……………熱を帯びていくのがわかる……………静寂な空間に第一声を発したのは俺でも光でも優や女達でもなく、先生の放送だった。

『これより、夕御飯に移ります……………終わり次第、後片付けなどをしていてください』

俺達は放送が終わると解散してそれぞれの荷物を片付けた……………

最終日もこれとなく終わり帰宅することになった……バスの中で野外実習の疲れかぐっすり眠る光……俺は自分の気持ちに気付いた……恐らく、俺は意識する前にもかいたら抱いてたかも知れない……俺は自問自答していて気づいていなかった……泥沼みたいにくべつとりしている深い闇が……この感情が自分の弱さに……暗い闇と繋ぐ鎖になるなんて知るよしも無かった……冷たい闇が俺を歓迎している……

「お帰りなさい……ふたりとも」

「ただいま……!」

「……ただいま」

「夕御飯までには時間があるから部屋で休んでなさい……疲れていてでしょ」

明美さんに背を向けて自室に入った……

「…………ッ…」

昨日のキスを思い出すと身体全体に熱が帯びる……………次第に熱は下半身に集中した。

「嘘だろ？」

俺はズボンを下げた……………露になった自身を見て後悔した……………
軀が熱を解放したがっている……………

「くっ」

俺自身に手が伸びる……………ゆるりと徐々に自慰が始まる

「光…」

あの情景がちらつく……………艶かしい光を思い出す……………限界をアツサリと迎えた。

「あ……ああああ………」

俺は放った欲望をティッシュで拭き取った……

「はぁはぁはぁはぁ」

射精後の倦怠感が襲う……舌を噛み締めた……とりあえず、風呂に入りたい……何もかも流したい……クローゼットから着替えを取りだし風呂場に向かった……シャワーがべっとりした液体を流す

「……………はぁん……………もう……やだ……」

また下半身が疼きだす……………俺はまた自身に手を伸ばす……

『彼方……………やっ』

細く締まった肉体に白い肌に黒曜石みたいな瞳……………突き上げると舞う漆黒の髪……………喘いだ声に快感に震える軀……………光の近くに居すぎたせいか情事の光景が脳裏に描かれる……

『やだ……………突き上げるな』

「はあはあはあ」

『イク……いつちゃう……』

『ああああああ』

光が口から唾液を出しながらイク……そんな想像をしながら俺は絶頂を目指した……自分の想像力……または妄想力がこんなにあるとは思わなかった……

「くはあ………」

再び白濁の欲望を吐き出す……俺は自分自身に恐怖を覚え、両手で自分の身体を抱いた……いつからだ？……どうして、気づかなかった？……鬱陶しいなら無視すればいい、面倒ならしなげばいい……いつの間にか……いや、出会ってから少しずつ、光を好きになっていった……俺はいつの間にか光のために何かをすることに喜びを見いだしていた……だから、面倒と思いながらも光のそばにいた……光だって、俺が本気で拒絶したならそばにいれないはずだ……そばにいたのは俺が本気で拒絶しないから……少し考えれば、気付いたはず……多分、俺は恐れている……光に嫌われるのを、俺のそばを離れるのを……拒絶しても中途半端だし、気持ちを知られると拒絶されるかも知れない……だから、拒絶しきれないし、優しくもできない……もともと……性欲が少ない

俺がここまで……光を襲いたいという衝動に駆られるとは……まだ春の季節にしては冷たいシャワーを頭と下半身を冷やしながら浴びる……お風呂から上がってからはできるだけ、いつも通りに光と明美さんに接した……拒絶したかったが……理由を尋ねられた時にさすがに光に欲情したから距離を置きたい何て言えない……だから悟らはれないようにしないと……ご飯を食べたら寝ることにした……なにも考えたくは無かった……考えると……光のことばかりを考えるような気がしたから……だから、眠るんだ……壊さないために、傷付けないために、失わないために……煮詰まったどろどろした欲望に理性の蓋を被せるんだ……願わくは決して溢れることの無いように。

光への気持ちを理解して1週間が過ぎた、相変わらず、俺は光達と一緒にいる……そろそろ、ゴールデンウィーク…光達は稽古があるとかで朔の家に泊まると、お父さんたちは恐らく、結婚式の準備が忙しいみたい……という訳でいつも通りにゴールデンウィークは独り……まあ、光と二人つきりよりはいいけど……携帯のディスプレイに恭の文字が出た。

『件名、彼方へ』

電話したけど、寝てた？ゴールデンウィークはうちに来ない？』

俺はため息を吐いて返信した……変態とはいえ、こんなときに独りで家に籠るよりは良いだろ……ゴールデンウィークまあとで僅か……

ゴールデンウィークの初めの金曜日……恭の暮らすマンションに俺は訪れた。

「お邪魔します」

「おう…入れよ」

モノトーンに統一された部屋……スポーツマンらしくシンプルな部屋にはバスケットボールや有名選手のポスターが貼られている……
…恭は親元を離れて独り暮らし……近くにスポーツに力を入れている高校もあるのに何故か紅夏高校に進学してきた。

「彼方？こっち来て」

「いいけど…」

近くまで来ると無表情の恭が近づいてくる……

「なんだ……んんっ」

いきなりキスを強要される……息が苦しくなるが止まることはなく、俺の口からどちらもつかない唾液が俺の口から零れ落ちる……しばらく、経つてようやく口が話される……俺は息を切らしていた……その間に恭は俺の黒いワイシャツのボタンを外し始めた。

「……………は？まじでやめろ」

俺は抵抗するがスポーツマンで185センチの恭と大したスポーツもしていない175センチの俺では敵うはずもなくぼたんを全て外された……………恭は俺の両腕を片手で封じた……………はだけたワイシャツの隙間から俺の突起に吸い付いた。

「やめろ……………」

「ヤダ」

恭ははだけたワイシャツを完全に脱がした……………恭の手が艶かしく俺の軀を撫でる恭……………背筋や腹に指を走らせた……………恭の冷たい手に思わずビクツと軀が跳ねる。

「感じてるのか？」

「違う！どけ！！」

俺が恭を押し返そうとすると恭はズボン越しに俺自身を撫でてきた……………与えられる快感に甘い声を上げてしまう。

「あん…ははあん、きよ…う…あ」

「気持ち良さそうだな？……もっと良くしてやるよ」

「は？」

聞き返そうとするが、その前に俺の軀が反転する……無理矢理、四つん這いにされた。

「……なんで？」

「……彼方は渡さない」

怒りを含んだ恭の声……思わず、戸惑っていると蕾に湿った指が挿れられた……

「くはぁ……」

これから自分のされることが理解できた……俺の中で動かされる指が何かを探して蠢く……異物感に思わず力んでしまう。

「……ははぁん、ああ……」

恭の指が何かを掠めた……異物感が吹き飛び電撃を受けたみたいに軀が跳ねる……

「ここかあ……」

「……………まつ……………ソコは……………っ……あ！……あん、ああん……」

恭の指が3本に増え、バラバラに動かされあまりの快感に声が抑えきれない……………強すぎる快感に恐怖を覚える……………軀は恭に支配されているが、心は光に支配されている……………心と軀がまるで別物みたいに感じる……………

「……………あ！……」

恭の指が引き抜かれる……………軀を支配している快感が無くなり立ち上がろうとするが恭の大きな手に腰を捕まれた。

「……………彼方……」

「？」

俺の名前を呼んだあと、指とは比べ物にならないナニが俺の蕾にあてがわれた……………予想できる最悪の事態に身体が栗立つ……………

「……………綺麗だよ……………彼方……」

「……………は？……………ああああああ」

恭は耳元で囁き、一幕、置いたあと、俺にとって凶器とも言えるソレで容赦なく俺の軀を貫いた……………異物感が再び襲いかかる……………蕾に神経が集中して恭のソレを嫌でも意識させる……………

「…スゲー、中が凄い気持ちいい」

「バツ……………うご……………くな……………」

恭は色の含んだ声で呟くと激しく律動を開始する……………あまりの激しさに軀が揺れる……………シートにシワとシミが作られる……………視界はぼやけ……………口からは淫らな声が漏れる……………

「……………ひゃん？」

「今から俺だけで支配してやるよ」

恭自身が俺の一番感じるところに刺激を与えられる……………俺は恭の言葉の意味を理解する前に快感という麻薬を与えられ、頭の思考機能がほとんど停止する……………俺の蕾にある恭自身が限界に近いことがわかる……………そして……………俺も……………

「イク……」

「ああああああ」

俺の中に熱いモノが注がれる……ワンテンポおいて俺も熱いモノを放つ……

「ヤッ、むり……マジで……あ……むり……だって……ああん」

恭は律動を再開させた……敏感になった俺の軀が熱を持つ……恭は俺の軀を貪った……何度も……

痛む腰を引きずりながら恭が寝てるうちにシャワーを浴びて洋服をきた……

「彼方？」

「話しかけるな」

俺はあのあと、恭は何度も性交を無理矢理、やられた……激しい情事のあと……軀が悲鳴をあげるがこいつと同じ空間に居たくはなかった。

「彼方……好きだよ」

「だとしても、もう会うことはない」

恭はため息を吐いて首をふる

「なんで、俺じゃあダメなんだ？中学の頃から好きなのに……」

「……………だから？」

こいつは最悪だ、人の気持ちを考えずに抱いといて……侮蔑の眼差しを向けてドアに手をかけた。

「……………」

「アンタを好きになることはない……………何があっても、もう……身体

を喰らせない……俺がアンタを求めることはない……これで最後だ」

俺は外に出るためにドアを開けようとした、その時……

「……………彼方は俺から離れられないよ」

「何を…

俺が怒鳴ろうとすると……

「彼方……………お前……………光って言うやつのが好きだろ？」

「……………ッ……………」

俺は振り向いて恭を見ると、驚いている俺が可笑しいのか苦笑して肩をすくめた。

「驚くことか？少しでも普段の彼方を知る人なら感ずくぞ？……………それに言っただろ？彼方がずっと、好きだったって……………ずっと、見ていたから分かるよ」

徐々に冷えてきた頭が情報を整理する……………そうだ、優達の腑に落ちない態度にも納得がいく……………恐らく、優達は気付いていたんだ……………俺の感情に……………そして、出会って間もない優達が気付いたくらいだ、中学からの付き合いの恭が気付かないはずがない……………目の前にいる、さらに悪魔はとんでもないことを言う……………

「……………光がこのことを知ったらどうなるだろう？」

「……………ッ……………」

「それにあのことを知ったらどうなるかな？」

腕を捕まれたわけではない、足を縛られたわけではない、ただ、その言葉が俺の心に鎖が付ける……………深い、深い闇へと繋がる鎖が……………

「止めてくれ」

俺は消えそうな声でただ懇願した、そんな俺ににやりと笑う恭

「……………俺が何を求めているか分かるよね？」

俺はベッドで上半身裸の恭に近づいてキスをした、唇を離すと満足したような表情の恭……………

「明日……学校が終わったら泊まりに来るよな」

今年のゴールデンウィークは月曜と金曜は平日……

「うん……」

俺がうなずくと恭は『明日は学校だし、帰っていいよ』と言われたので帰ることにした……俺は重い足取りで家に向かった……部屋に入って声を殺して泣いた……もう、逃れることの出来ない闇に囚われた……涙は溢れ……身体に残る情事のあと特有の鈍い痛みは闇に堕ちた俺に焼き付けられた烙印……光と過ごした甘美な時間が遥か遠い時の出来事を感じる……ごく、最近……射し込んだ……“光”なのに

「彼方…」

ここは今は使われてない別校舎の空き教室……あれから1ヶ月も続いているセックス…暇さえあれば学校だろうがお構い無しに身体を重ねてる……女みたいに綺麗な胸をしているわけではなく……光や優みたいに可愛い顔をしているわけではなく……なぜ、俺か？…という疑問は日々が経つに連れ膨らむ一方……俺が光をいつの間にか愛したように恭もいつの間にか俺を愛したのだろうか？……と気持ちが全く分からないわけではない…とはいえ、納得できるではないが

「……………相変わらず、綺麗だよ、彼方」

恭はいつも行為を始める際は俺に『綺麗だよ』と言ったあとに顔のパーツに1つ1つを指でなぞり、キスを優しく落とす……まるで、これからの行為の許しを請うように……いつもの“儀式”も終わり、ベルトが外れる音がする…ズボンが床に落ちる。

「……………ッ……………見るな!!」

恭の視線は俺の太股を刺すように見つめている……俺はカッターシ

ヤツを下に下に引つ張ってパンツとその下から自己主張を始めた俺自身……恭はこういう羞恥プレイ………もといい、チラリズムが好きらしい……

「可愛い」

男に可愛いは間違っても誉め言葉ではない……

「なあ、恭……お前……よく、萎えないな……」

中性的とは言え男だ……確かに、華奢な体型をしているが肌は白くはなく顔も普通……それが女みたいに恥ずかしがる姿を見て萎えないなんてあり得ない………恥ずかしながら聞くと苦笑された。

「……クスッ……萎えないな……こんな綺麗な人を見て」

最近は俺の身体が敏感になってきていて見つめられただけで先走りはパンツを湿らせる……

「最近は敏感になってきているね？」

ハートマークが付きそうなくらい甘い声……普段なら吐き気がする………とか、言って悪態を付くだろぅが羞恥と快感がそれを許さない

……恭は俺のパンツを脱がす……勃った俺自身を食い入るように見つめる……その顔がなんとも言えないくらいエロい顔をしている……

「はあはあはあ」

「おいで彼方」

俺はおぼつかない足取りで恭に近づいた……恭は俺に優しくキスする……恭の整った顔が近くにあり俺自身が馬鹿正直に反応を示した。

「……………クスッ」

「これは違う…違う…ちがつ、あ！、ああん」

「何が違うのかな？ここをこんなにして」

恭は俺自身にゆるゆると刺激を与える……俺自身の先端は透明な液体に覆われている……恭はニヤリと笑い扱うスピードをあげる。

「あん、あん、ああん…イク、お願いやめて、イッちゃう…あああああ」

恭の手に白濁の液体が放たれる……それを厭らしく舐める恭……

「さて……」

俺が放った白濁の液体と別の透明な液体が恭の手についた……その手を俺の蕾に挿れた……クチャクチャと水音が俺の蕾から聞こえる……恭のサラサラの髪が俺の頬を撫る……俺の軀を知り尽くした恭は迷わず前立腺を刺激する……俺の足から力が抜けていく……恭は片手で俺を支え、片手で俺の蕾を解す……

「ヤベー凄い顔がエロい」

蕾には指が3本も飲み込んだ……不規則にパラパラ動かされてはいるが感じるところは逃さずに刺激する……そのたびに俺の軀は跳ねる……恭は深いキスする……窒息死しかねないキスと前立腺を刺激する指によって、一度欲を放った俺自身は見事に復活を果たしていた……ようやく、唇が離れた……俺と恭を繋ぐ銀色の線……

「はあはあはあ」

酸欠状態の俺を余所に制服を脱ぎ捨てて恭……桜色の肌に夜空の様な漆黒の瞳は今欲望と言う名の煌めきを宿している、肉体美を

極めた均等の取れた軀は俺の性欲を煽る……そして、これから俺を貫くであろうソレは先走りで欲求負担を主張しているようだ……
何度、やっても慣れない……俺は息を飲む……

「……あ！」

蕾から指が抜かれる……思わず零れた声に顔を赤くした。

「……物欲しそうな声だな？望み通りにくれてやる」

恭の言葉に恐怖を覚えた俺は恭を突き飛ばして逃げようとするが……
……逆に後ろから拘束される。

「いやだ、いやだあああああああ」

十二分に解された蕾に恭の熱いモノに貫かれる……

「凄い気持ちいいよ……彼方」

何度、やってもやはり慣れない……恐怖心から抵抗してしまうが……
……逆に恭のSを加速させるだけ……俺が啞こんだ、恭の熱いモノが膨れ上がるのを感じる……

「あ……あ……」

恭の激しい律動に俺の軀は揺れる……結合部分が悲鳴をあげて、前立腺を突かれる……今の俺はシャツが擦れただけで感じる淫乱な軀に堕ちていった……倒れたいが恭の手が腰を固定してるために倒れることが出来ない……

「…………無理…放して死んじゃう」

律動がさらに激しさをます……限界が近い……

「ああああ」

「くっ」

熱いモノを注がれた……俺の欲を解き放ち脱力しながら机に寄り掛かる……足にとろみのある液体が滴り落ち……それすら快感に変わる……

「もつとだ」

「もう無理」

恭は抵抗する俺を力で押さえ付けて跨がされた。

「いや、深い…」

あまりに深く繋がったために軀が再び、熱を帯びる……何度も欲を放ち、何度も欲を放たれた。

「……………ッ……………」

腰が軋む……………動かない身体を起こす。

「大丈夫か？」

心配するなら手加減しろ……………と言いたいが言っても無駄だろうし、身体はだるいし、それに恭のSに火をつけたくない……

「体育館のシャワールームに行くぞ」

俺はなんとか痛む身体を起こして体育館に向かった。

テスト間近……………基本的にテストが近くなると部活が休みになる……………
……………そのおかげでいつもは家まで行って処理してたのをすぐに処理は嬉しい……………はず……………なんだが

「あッあッあッ…あん、あん、ああん」

処理を手伝うと言って半ば力づくで無理矢理、処理をしていた、恭が発情してさっきから掻き出すのをやめ、前立腺を狙ってくる……………

「おね……………がい……………ゆるし……………て」

快感で呂律が回らなくなりかけながらなんとか懇願した。

「無理…我慢できない」

「ヒッ…嫌だ…あ！ああああ」

恭は興奮状態の獣ごとく、俺に腰を打ち続けた……

「……………」

「……………マジでごめん」

あのあと、また、気絶するまで犯された……………ただでさえ、キツいの…に…疲れた……

「彼方？」

「何でもない」

はあ……とため息を吐いて制服を整えた……で、恭の家と向かった。

テストも終わり、ため息を吐いた……恭のせいでテストは終わったな……人気のない教室に優と一緒に先生から頼まれた、提出物の整理を行っている

「彼方くん？」

「優？なんだ？」

「最近、光くんを避けてませんか？」

ついに聞かれたか……できれば、光の顔は見たくない……

「いや？」

「ふん？」

「……………別に好きだから避けてるわけではないよ」

優は思わず動揺する……………やっぱり…

「やっぱり気づいていたか……………」

「……………ええ……………」

「まあ……………珍しい話では無いから……………優と朔も“そういう関係”だし」

「……………そうですね」

「まあ……………光には黙っておくよ」

優はため息を吐いて提出物と向き合った。

「それよりいつ、気付いたのか？」

「最初は気のせいかと、思いましたが日が経つに連れて、彼方くんの表情や態度で」

そんなにあからさまだったのか……

「そんなに変化は無いんですが……わずかに普段と光くんの時は違うんですよ……彼方くんは……」

……もしかしたら……光はあの人に似ているかも知れない……いつも引つ込み思案で暗い俺の手を引いてくれた、あの人に……だから、好きになったかも知れない……

「彼方くん？」

「なに？」

「最近、妙に視線を気にしてませんか？」

それは恭に光と居るところを見られたくないからだ……ただでさえ、性欲が強いのに、嫉妬までされたら、腰が碎ける……なんて、優

に言えない……俺が光を好きと知っているせいか、最近の優は俺のことを根掘り葉掘りと聞きたがる……

「気のせいだよ……さて、俺は話したし……優と朔のことを詳しく聞かせてよ……もちろん、俺のこと根掘り葉掘り聞いたから答えるよな？」

ぐっ……と優が押し黙った……

「あー疲れた」

優を弄って遊んでたら、朔に見つかり睨まれたが、恋人を自慢したいらしく、優のことを熱く語ってくれた……もちろん、本人の前で……その時の優の顔ときたら……俺と優は提出物を職員室に持っていった……二人の仲を邪魔になりたくないなので職員室で優と別れた。

「……………くんのこと……ずっと、好きでした」

光のクラスで誰かが告白をしている……俺は声のしたほうを覗く……そこには見慣れた人物がいた。

「光？」

光とそいつの唇が触れる……俺は見ても立っても居られず、その場から逃げ出した……優に言われた通り……光と話してない……

「はあはあ……」

頬を一筋の涙が落ちる……ヤバい……今日からどう光と向き合えばいいかわからない……あと少して光への淡い気持ちを忘れられそうなのに……忘れようと努力していたのに……あの日……あの時……出逢わなければ……こんな苦しい想いを抱くことも、恭に強姦されることも無かったのに……なんで……俺と光は出逢ってしまったのだろう？……なんで俺は光を好きになってしまったのだろう？

「ははは……もう梅雨か」

雨が降る……ザーと言う音が人気のない廊下に鳴り響く

空も泣いてるのかな？そして俺も……俺は傘も指さずにこの大雨の中、家路に着いた。

……光が告白されて1週間…俺はなんとか光への淡い気持ちを押さえこんでいる……………

「彼方？」

「なに？」

「も…話ちゃんと聞けよ」

長い平日も終わり今日は光とショッピングモールで食材の買い出しをしている……恭がバスケの試合で居ないため光と久しぶりの外出…

「彼方…」

「なんだ？」

「久しぶりだね…こっという風に話すの」

「……そうだな」

寂しかったのか光はどことなく元気がない

「ゴメン……」

なぜかうつむいたまま謝ってきた光……

「は？なんで？」

「最近……彼方、疲れてるじゃん……いつも俺が迷惑かけるから……」
確かに疲れているけど、それは恭との情事のせいで光には関係無い……
……わけではないがそれは俺の気持ち……光が責を負う必要はない

「気のせいだろ？」

「でも……」

「大丈夫……お前のせいじゃない……少し、馴れない生活のせいだから
気にするな……俺はあまり人と話す機会がないからな……急に増えて
疲れているだけだ」

「でも、気を使わないでよ?」

「ああ……」

「……なんか、甘い物でも食べようよ」

「……そうだな」

俺達はショッピングモールにある喫茶店に入った。

「…彼方?」

「なに?」

「再婚して良かった?」

俺の顔を見ずに消えそうな声で尋ねる光……いつもような元気がない……そこに何か不安を覚える。

「……おい、光？俺よりお前のほうが変だぞ？何かあったのか？」

俺は光の肩に片手を置いてもう片方で光の顎を上げた。

「どうした？」

切なそうに俺を見上げる光

「この前……クラスの仲の良い友達に告白されたんだ……」

知ってる……

「だけど、俺……そいつのことが好きか、分からない……」

「なにを悩んでるんだ？」

「そいつの友達に言われたんだ……」

「……分かった、もういい」

そいつの友達とやらは恐らく、はつきりしない光に苛立ってしまったのだろっ…光はこういうことに関して疎そうだからな…それに優しい性格の光のことだ…焦らせば、了承しかねない…

「光？」

「どうしたらいい？」

迷子になった子供みたいな瞳で俺を見つめる光。

「…………別に急がなくていいよ、もし、それで愛想が尽きた…………なんて、言うならその程度だろ」

「でも…」

「相手が本気ならいつまでも待つさ…………本気でも無いのに付き合ったら傷付くのは光だよ…………それに…」

「それに？」

俺は知ってる…一方通行の関係がどんなに虚しいか…

「愛し合って無いのにセックスしても虚しいだけ……
愛する人は光がそばに居て幸せだと感じて、幸せを感じてくれる人
を選べよ……大丈夫……きつと、良い人が見付かるから焦るな
……俺も協力するし」

最後は掠れたけど……必要なことは言い切った。

「ありがとう……やっぱり、彼方は大人だな……頼りになる」

『頼りになる』……光の言葉に頬が緩む……

「さっきの質問だけださ……」

「再婚のこと？」

「うん……後悔はしてない……確かに不満に思うことはたまにある
けど、それだけではないから……そういう光は？」

「俺は良かった……父さんは優しいし、母さんも笑顔が増えたし……
……なにより、彼方に出逢えたし」

光は今日1番の笑顔で答えてくれた……………俺の顔に熱が集まるのを感じる…俺の恋は報われないかも知れないけど…………でも、報われない恋をしているのは何も俺だけではないし…………それに光の笑顔が近くで見れるならわざわざ“恋人”にならなくてもいいし……………光と居ると俺の中にある汚れが洗い流されるような清涼感…これが人を“愛する”と言うことか？…………報われない恋なのに満たされる。

「彼方？」

「なに」

「……………ありがとう」

頬を紅潮させながらも、笑顔で礼を言う光…………俺の中に何とも言えない喜びが駆け巡る。

「大したことじゃないって…………そろそろ、行くぞ」

俺達は会計を済ませて喫茶店を出た、ショッピングモールの食品コーナーに夕食を買いに向かった。

夕食を済ませ、お風呂を浴びて、俺は今、リビングで1ヶ月前に買った本を読みながら光のことを考えていた

光への感情は1ヶ月前と異なり安定していた………以前は光を無理矢理、犯したい…欲望を振り込ませたい、白い無垢な肌に赤い束縛の楔を付けたい…自分でも最低だとは思うが……あの深みのある黒曜石の瞳に見詰められる度に…柔らかい漆黒の髪が揺れ、俺の頬を擦る度に…白い綺麗な肌と俺の飴色の肌が重なる度に…理性は蝕まれていった…それを耐えるのが苦痛で仕方なかった……恭に強姦される日々……光と軀を重ねた訳ではない………ただ、少し話しただけ…それだけなのに、恭とのセックスとは得られない“何か”を得た気がした。

「ただいま……」

「お帰らない、明美さん」

明美さんはリビングに上がった……俺は今日、作った夕食を温めた。

「聖夜と光は？」

「父さんは会社の人と飲み会で遅くなるって……光は今日の今日まで宿題を忘れて俺のを写して疲れて寝ている」

「彼方……光を甘やかしちゃダメだよ」

惚れた弱味が最近、光に甘くなつたのを皆が言わずとも理解している……恋すると人は変わると言っが……自分がここまで変わるとは……

「……はい」

今日の夕食は肉じゃが……

「わざわざ、ありがとう……」

会話が止まる……考えてみると明美さんと二人きりは始めてかも……何時もは光と父さんが居たから会話が詰まるってことは無かったけど……

俺は本に目を落としながら明美さんを観察してみた……父さんと1、2歳しか変わらないらしいがそうは見えない……他人からみたら、

俺と親子って言われて信じる人は少なそうだ……下手すると二十代の後半に見える。

「彼方？」

「ああ……どうかしました？」

「聞きたいことがあるから……」

容姿は光に似ているが性格が正反対……子供街道まっしぐらの光、大人な雰囲気纏っている明美さん……母親だからかも、知れないが……

「何ですか？」

「再婚のこと……後悔してない？」

わりとそうでもないみたい……

「それは昼に光にも聞かれましたよ」

「え？」

かなり驚いたあと……何かを考えている明美さん……数分経ってゆっくりと呟くように話始めた。

「……彼方って、わりと口調や表情に出やすいタイプなんだよね」

そう評価されたのは始めだった。

「……どういことですか？明美さん？」

ハッと気付いた……無意識に呼んでいたが……いつまでもさん付けで“母さん”と呼んだ試しがない……明美さんはそれを気にしていたのか……確かに光は父さんをちゃんと“父さん”と呼んでいるし。

「……別に無理する必要はないけど」

今日……光が明美さんと同じような質問したのはこれが理由なのか？

「光……って、さ」

「うん？」

「似てるんだよな……死んだ俺の“母さん”に……」

明美さんは息を飲む……俺は紅茶を淹れて明美さんと向かい合うように座った。

「……明るくてお節介で……もともと、引込み思案の俺の手を引いてくれて………けんかをすることもあったけど、幸せだった………最後は俺が殺したようなもんだけど」

「聖夜は交通事故だった………て言ってたけど……」

不安そうに………だけど、真っ直ぐに俺の瞳を見つめる明美さん……

「交通事故………間違いではないけど……」

父さんがどう言うようがあの事故は……

「小学校の卒業式が終わって俺と母さんは晩御飯の買い出しをするために近場のスーパーに行く途中にあった本屋にあって、そこには

俺が前から欲しかった本があつてさ……俺が買つて駄々をこねてけんかになつたんだよね……」

紅茶をひとくち飲む……ダージリンの甘い香りを嗅いで少し心を落ち着ける……

「俺はそのまま家に独りで帰つて部屋に籠つていた……二時間くらいかな？それくらい経つてから慌ただしく父さんが帰つて来たんだ……いつもは遅いの……今日も遅くなるって言つていたのに……帰つて来ると俺の部屋に来て急に俺に抱き着いて、泣き出したんだ……母さんが飲酒運転の車に引かれて死んだ……って、父さんから聞かされて……俺の死体が見つからなかったから……母さんに会いに行くより俺の安否を気にして探しに来た……病院に向かう車でそのことを聞かされてさ……病院に着いて母さんと対面された時はほとんど俺も父さんも放心状態で……葬儀も終わってからかな……警察から遺品を渡されたのは……その中に一冊の本があつたんだ……俺が欲しがった本が……」

紅茶を飲み干す……カップをソーサーに置くと乾いた音が鳴つた……それが合図になつて俺は続きを話した。

「……母さんはその本を買つて本屋から出た時に事故にあつたんだ……もし、あの時……けんかなんかしなければ……死ななかつたのに……今でも生きてたのに……」

何分……経つただろうか？……沈黙を切つたのは明美さんだった……

「彼方の気持ちは分からないけど……彼方のお母さんは彼方を責めたりしないと思う……親は子供を甘やかすのは習性みたいなものだし……親は子供の一番の頼れる存在でいたいんだよ……だから、子供の前だと強がるし、甘やかしてしまう……きつと、それは悪いことじゃない……親なら子供の幸せを願うもの……彼方のお母さんのために彼方は幸せにならないと……」

「分かるの？」

「……分かるよ……彼方のお母さんと“同じ母親”だから……」

頬に生暖かいものが伝う……再び、リビングに静寂が支配する……

……明美さんと母さんの笑顔が重なる……まるで母さんと話しているみたいだ……心をさらけ出せる……

俺は明日は学校だからと言って俺は自室に戻った……ベッドに倒れ込む……枕に顔を埋めて唸った……心が軽くなると同時に恐怖感がある……明美さんが大切な息子に……光に俺が恋愛感情を抱いている……って、知ったらどうするだろうか？悶々と考える内に睡魔に襲われいつの間にか寝てた。

今日も四苦八苦しながら午前中の授業を終えて、どうにか昼休み……
……光、優、朔と屋上で昼食を食べている

「はぁ……」

「最近、疲れてませんか？、彼方くん？」

「少し、寝不足なだけだ」

最近、寝れずにいる……恭との情事がない日でも夢でうなされる始末でろくに睡眠が取れない……

「それに少し、痩せてきてないか？彼方？」

「……いや？……気のせいだろ？、光」

食欲が以前より確かに落ちてきている………最近、少しでも

運動すると息を切らしたり、目眩を起こしたりと体調不良が続いている

「……………あんまり無理するなよな？彼方…」

「そうですね、光くんには世話は彼方くんの役目ですから」

「そうだが、そんな面倒なことを俺たちに回すなよ」

「ちょっと、2人とも？」

「……………努力する」

「彼方まで！？」

「光の面倒見るの大変だったんだからな」

「そうそう……………彼方くんが居ないと光くんは何するか分かりませんし」

「そこまで酷くないよな？彼方？」

「……………」

「ちょっと、俺ってそんなに酷い？」

「」「うん」

「……………」

光は地面への字を書き始めた。

「ほら、お子さんがへこんでるぞ、慰めに行かなくていいのか？保護者？」

ついにその異名を授かる羽目になったか

「誰がお子様だ！………彼方も目を逸らすなよ」

「やれやれ」

「むうゝみんなして子ども扱いして」

「子供だろ？」

「ですね」

「だな」

「うわあああん」

光は泣きながら屋上から出ていた、その後ろ姿が見えなくなるのを確認してから優は話し始めた。

「追わなくていいんですか？」

「ああ」

「ちゃんと保護者業務をしるよな」

「はあ、いつからその二つ名をつけられたんだ？」

「彼方くんは本当に光くんが好きなんですね？」

「そうか？」

流石にそこまで行くと自分でも引く

「ええ、かなり顔が緩んでますよ」

「……………」

俺が悶々としてると優にしては珍しくにやりと笑った。

「嘘ですよ」

「嘘かよ……！」

俺が思わず叫ぶと朔もにやにやしだした。

「お前……意外と表情豊かだな」

「彼方くんは最初はかなり無表情だったんだけど……光くんが関わると顔色が変わるよね」

「そうか？」

「うん」

何故、優と朔は先ほどとは違って穏やかな笑みを浮かべている。

「……………はあ、他人事だと思って……」

俺は呆れながらため息を吐いた。

「僕らは純粹に彼方ちゃんと光くんを応援してますよ」

「どうだか？」

「それはどうでもいいけど……………」
「……光を泣かすようなことはすなよ」

「はいはい……………そろそろ時間だろ？教室に戻るぞ？」

俺らはごみを片付けて教室に向かった…

「……………どっち保護者なんだか？」

俺の前の二人に聞こえないようにこっそり呟いた。

午後の授業も終わり、帰宅したんだが

「相変わらず何もないな…」

「……………」

今日は親と光が外泊のことを恭に喋ってしまい家に押しかけられた

.....断る理由が特にないためにすんなりとあげてしまっ
た。

「はぁ.....」

「彼方？」

「なん!？」

いきなり壁際に追い詰められ深いキスをされる.....抗うことは
できずキスはさら深くなるばかり、せめてもの抵抗で胸を叩く、恭
はリップ音を立てて唇を離す

「.....エロ」

「.....毎度、毎度、盛ってんじゃねえ」

「すぐくそそる.....その反抗的な瞳」

「この変態」

恭は俺のシャツのボタンを丁寧に外す、俺がゴクリと唾を飲む…その音を聞くと恭はニヤリと妖しく笑った。

「そんなに固くなるなよ……それとも感じている？」

恭はそう言っていると俺を抱きしめて耳を甘噛みする、嬌声を出さないように唇を噛む、俺は恭を睨むが恭はさらに強く俺を抱きしめた。

「ねえ…どっち？」

「ひゃあ!？」

耳に息を吹きかけられ思わず声が出る、顔に熱が集まるのが分かる……これからのことを考えただけでなかなか冷めそうにない熱が全身を駆け巡る……一番、露骨に反応が出たのは俺の中心だった

「ふん?どうやら、感じているみたいだね?じゃあ、彼方の期待に応えようかな?」

「ちがつ」

「なにが？」

「ふわぁ、あう」

いきなり自身を揉まれ嬌声を上げる、それを見て口の端を吊し上げる恭

「……………光」

「……………」

俺は呟いたことを後悔する間もなくベットに落とされる

「……………恭？」

「……………ッ……」

恭は俺の服を完全に脱がせ…戸惑う俺をよそに肩に顔を埋める

「おまつ!?!」

怒鳴ろうとするが俺自身をネクタイで結ばれて息を詰まらせてしま
う……

「恭……」

恭自身が俺の蕾に当てられる。

「ああああああ、痛い!痛い!!!」

何の予告なしに挿し入れられたソレは俺の軀を貫いた。

「痛い、痛い」

「はあはあ」

俺の悲鳴と恭の荒い呼吸音と情事で生じる水音が部屋に響く……恭は俺の前立腺を強く突く、イキたくても俺自身に結ばれたネクタイがそれを阻む

「イカしてえ……ああああ」

恭は何度目か分からない絶頂を迎える……俺のナカは恭の熱い液体で満たされかける

「光のことを忘れるよ……そうすれば楽になれる……
……なのに……なんで彼方は、光のことが好きなんだよ」

俺がなにを言おうか迷っていると部屋の扉が開かれる、俺のナカにあった恭が抜かれる……恭が誰かに蹴り飛ばされたんだ……俺の働かない頭は現状を飲み込めずにいる。

「彼方…………大丈夫か？」

恭を蹴り飛ばしたヤツの顔を見て俺の体から体温が逃げていくのを感じた

「やだ、光……………見るな」

俺はシーツを全身に包り体を隠した……

「大丈夫、風呂場に向かおうか？」

光は優しく微笑むとシーツごと俺を担ぎ上げた。

「……………ッ……………」

風呂場で下された俺の蕾から白濁の液体が足を伝う

「とりあえずこれを外すよ？」

制止する間もなく光は俺自身を結んでいるネクタイを外した。

「うああああああ」

解かれると同時に俺はイッた……俺の喘ぎ声が風呂場で膨張して響く……あれだけ刺激を与えられて塞き止められた俺は何度もイッた……光は俺が欲望を出し切ると気まずげに訪ねてきた。

「なあ……これどうするの？」

俺は薙に指を挿れてナカのモノを出そうとする……イッた後の虚脱感と情事の疲れのせいでなかなかうまくいかない……辛そうな俺を見かねた光は俺の手を薙から抜いた。

「？き出せばいいんだな？」

「そうだけど？」

そういうと光の細い綺麗な指が俺の中に入ってきた……光の指が内壁に当たるたびに出そうになる喘ぎ声をこらえた、ほとんど？き出し抜こうとする光の指が俺の前立腺にあたりイってしまつと同時に

俺は気を失った

「ふう」

「まだ、拗ねているぞ、こいつ」

朔の家の道場で練習を終えて今日は両親もいないし、週末だということ
で朔の家にお泊り

「そうだ、ほ……彼方くんも呼んだらどうです？」

「それは名案だ、おや……彼方を呼ぼう！せっかくだし」

「みんなして俺を子供扱いして……行ってくる」

俺は家に彼方を迎えに行った。

「あれ？」

彼方の靴ともうひとつ知らない人の靴がある

「彼方？」

彼方の部屋の中から悲鳴みたいな声が聞こえる………なんだろう、
確かこういう声は………喘ぎ声？みたいな彼方の声が聞こえる……
………あれ？

「あッあッあッ」

間違いない彼方の声だ……

「………邪魔したらまずい………よな？」

俺は渋々立ち去ろうとすると相手の人の声が聞こえた。

「男の人としてるんだ………うん？」

「光のことを忘れるよ……………そうすれば楽になれる……………
…なのに……………なんで彼方は、光のことが好きなんだよ」

もしかして強姦されてる？……………俺の中の“何か”
切れた。

「そこまでだ」

黒い髪のを蹴り飛ばした……………男の中心が抜けた衝撃で喘ぐ彼方……………
俺はそのまま胸倉を掴んで玄関から出してドアの鍵を閉めた……………
……………彼方の部屋に戻ると焦点の定まらない虚ろな目をして
た彼方……………俺がそばに駆け寄るとシートで体を覆って震えてる。

「彼方……………大丈夫か？」

俺の顔を見ると震え出す彼方に俺は近づいた。

「やだ、光……………見るな」

「大丈夫、風呂場に向かおうか？」

俺は怯える彼方を抱き上げた。

風呂場で下ろすと彼方は何かを取ろうともがいてる

「とりあえずこれを外すよ？」

俺は彼方の自身を結ぶネクタイに手をかけた。

「うあああああああ」

とりあえず、ネクタイを外すと彼方は何度もいった……

「なあ……これどうするの？」

彼方は俺がそう聞くと自分の蕾に指を挿れた、ふらついた足で処理

する彼方を見てられなくなった俺は彼方の指を引いた。

「？き出せばいいんだな？」

「そうだけど？」

俺が指を挿れると苦しそうに喘ぐ彼方……処理も終わりに差し掛かったところで俺の指が何を掠め彼方はイッた……そのまま彼方は意識を飛ばした……

「……………」
「ごめん」

俺は片手で彼方を支えた、俺は彼方の体を洗い風呂場を後にした。

俺は彼方を着替えさせたあと、汗と水に濡れている洋服を着替える
ついで風呂に入った……頭を乾かしてから彼方の部屋
に入る……ふいに彼方の顔の血色が悪いことに気が付いた……さ
らさらの茶髪に指を走らせる……

「ふう〜」

ゆっくりしていると不意にあの黒髪の男の言葉が読みがえる……

『光のことを忘れろよ……そうすれば楽になれる……
……なのに……なんで彼方は、光のことが好きなんだよ』

あれ？……彼方が俺のことを好き？

「うーん？あれ？光？」

彼方は眠そくに起き上った……

「体は大丈夫？」

「平気…どうし……」

彼方は何があつたか思い出したのだろう、体を震わせて怯えてる

「彼方…大丈夫だから怯えるな………何があつても守るから」

俺は彼方を抱きしめた……彼方は戸惑つたあと俺を抱き返した。

「光？」

彼方の肩が震える……俺は少しだけ彼方を強く抱きしめた。

「………彼方は俺のことが好きなのか？」

「ちがつ」

「聞こえたんだ…あの男が言っていたことが」

彼方はかなり焦っている……

「ごめつ、忘れるから、あの…」

彼方がこんなに焦るのは初めて見る……怯えながら震える彼方の手を握った。

「落ち着けて、俺は彼方を好きだよ……」

……家族として……だけど、分からないんだ……

……彼方を家族として好き……」

だけど……彼方を失うなら……と考える自分がいる……俺も彼方もまだ先とはいえ別れが来る日は必ず訪れる……いや、違う……今のうちに彼方と会う時間が急激に減るだけで関係はなんら変わらないのに……彼方に俺以外の“大切な人”が出来るのを嫌う自分がいる……今日だってあの黒髪の男に強姦され

ていて怒る一方で恋人でないことを安心する自分がいる……
……彼方がひどい目にあっているのに最低だな……

「俺はただ彼方にそばにいてほしただけなんだ」

我が儘かもしれないけど、それが俺の願いなんだ……

「……………もし……」

「うん？」

「光が俺を必要としてくれるなら……………俺はいつでも
光のそばにいるよ」

彼方の茶色い瞳から涙が溢れる……その涙は彼方の蜂蜜色の肌をゆっ
くりと落ちていく……………その姿に思わず『綺麗だ』と言いそうに
なる……俺は彼方を抱き寄せそのままベットに落ちた……………
彼方の水分が豊富で柔らかい肌はまるで水枕に頭を乗せているよう
な心地よさだ。

「光？」

「……………なんか、彼方を独りにしておけない……」

彼方は無言のまま俺を抱き返した。

しばらくすると彼方の規則正しい寝息が聞こえてきた……………もし、父さんと母さんが結婚しなければ……………もし、俺が彼方が再婚に反対したなら……………俺達はどういう関係になったのだろう……………再婚して出会わなければ彼方は俺を愛したのだろうか……………何か胸に寒いものが走る……………まだ暮らし始めて1ヶ月くらいしか経ってないのにここまで大きな存在になってしまった……………彼方が俺を好きだと分かったとき……………クラスの子に告白された時とは違う“何か”を感じた……………それは家族だから？兄弟だから？……………それとも……………俺が彼方を“好き”だから？

俺は彼方が着ているタンクトップの間に見える赤い斑点が見た……
…あの男が付けた彼方が強姦されたという証……俺か肩から見える
“それ”に噛みついた。

「痛!？」

痛みのがあまり起きてしまった彼方……俺は深い後悔とともに噛みつ
いたほうの肩を見た。

「大丈夫か？」

「うん……大丈夫」

彼方は疲れているせいかなそれだけを言うと再び眠りについた……俺
はホッと肩を撫で落とす、自分でも何故噛みついたか分からない……
心に制御不可能な“何か”が俺を突き動かす、なんとも言えない感
情が……その感情に気づくまであと………

『母さん……………』

あの日……………俺は母さんを守るって決めたんだ……………絶対“
守る”って何があっても……………あの男にまだ見ぬ愛しい人を守れな
かったから……………せめて……………これ以上に傷つかないように……………大
切なものを失わないように

「おい」

「うん？」

朔が不安そうな顔で俺を見ている……………朔はクールで冷たい印
象を受けるけど、意外と友達思いで優しいところがあるんだよな。

「移動教室だぞ？光」

どうやら、一限まるまるを寝ていたみたいだ。

「何かあったか？うなされていたぞ？」

「ちょっと、あのころの夢を見たんだ」

「そうか」

朔はいつもなら不安そうにするがそれがない……

「……………」

「どうかしたか？」

「いや……最近、見なかったのに……どうしたのかな？
って」

「……彼方と喧嘩でもしたか？
」

「いや、喧嘩はしてない」

ほう……と朔はうなずいたあとうんうんとか納得
した。

「なあ……」

「なに？」

「俺と母さんは幸せになれると思う？」

「それは俺は知らない……………聞くなら、彼方に聞けよ……………」

「……………なんで、彼方なんだよ」

それではまるで俺が彼方を好きみたいじゃないか……………

「光はさみしいんじゃないのか？」

さみしい？

「……………どういう意味？」

「……………光は彼方と出会って“あの夢”を見なくなっただろ？」

「……………うん」

「つまり、彼方は光にとってそれだけの意味を持つ人物になつていったのさ……………まあ、自分だと案外分らないこともあるさ」

「ますます、分からない？」

「それが分かった時は“ある意味”お前らは苦しむんだろっな」

朔は苦笑して俺の髪を撫でた。

「どっいつ意味？」

「それはいずれ分かるさ…………俺達は味方だから」

「っう」

朔はやれやれとため息を吐いた。

「……………訳わからないなら保護者にでも聞けよ」

「彼方は保護者じゃねーよ」

俺は朔を教科書で殴って教室から出た。

「……………俺は別に彼方に聞けなんて言っていないんだがな」

朔がクスリと笑ったのを俺は気づけずにいた。

「「終わった」」

俺と優は屋上で大の字になった。

「何も始まってないだろ？」

いきなり黄昏る俺達に彼方はかなりの呆れ顔をしている。

「優……………大丈夫か？」

「頭痛い」

「……………」
「ご愁傷様」

「今度のテスト……………終わったな……………」
……………優、どこかテスト期間どこかに遊びに行こう……………」

「やる前から諦めるな」

「彼方だって、分からないだろ？あんな難しいの」

「別に？簡単だったけど？」

「むきーいつもいつも何事もそつなくこなして…うらやましい限りですね？」

「いや…うまくいかないことも多々あるぞ」

「例えば？」

「あほな義弟の教育とか？」

失礼な…

「……………ご苦労様です」

「……………ガンバ」

優と朔が彼方の肩を叩いた。

「みんなして子ども扱いして」

「子供だろ？なあ、優？」

「そうだね、朔」

「か、彼方？」

俺は彼方に助けを求めると

「二人とも？その辺にしとけ」

彼方…

俺は彼方の愛を噛み締めてると…

「子供は子ども扱いされると余計に反発するだけだぞ」

覚えてろよ…

「そうですね、彼方くん」

「そうだな、彼方」

「ほら、むくれてないでそろそろ昼休みが終わるぞ?」

「誰のせいだ」

あの日から数日が経つが彼方とは以前と変わらない会話を続けている……俺は未だに彼方に対する自分の気持ちが理解できず

にいる……兄弟と
思っているはずなのに、
彼方といると心が
苦しくなる……

「早くいかないと遅れるぞ、次は体育だろ」

俺は彼方に急かされて屋上を後にした。

「さあ……楽しい体育の時間だ」

「あーはいはい」

五限目の授業は楽しい体育の時間。

彼方は呆れながら制服のボタンを外し始めた……下着として中から着けているタンクトップから見えるスレンダーで締まった肉体にきめ細かい綺麗な肌と薄い赤い斑点……いつ見ても扇情的で色っぽい……

赤い斑点？

「待った、ストップ、彼方」

「どうした？」

俺は彼方の近くまで近づいて耳元で囁いた。

「キースマーク……まだ消えてない」

彼方の肩がビクンと跳ねる。

「……………」

「大丈夫？」

「ああ……」

うずくまった彼方……段々、顔から生気が抜けていくのが分かる。

「どうしましたか？光くん？」

「……………彼方が体調悪いみたいだから保健室に行ってくる」

俺は彼方の服のボタンを付け直して、優に先生に上手く言うように言ったあとに保健室に向かった。

保健の扉を開けると消毒液の独特の香りが風に乗って俺の鼻にツンとした匂いが広がる……………どうも、この香りは好きになれない。

俺は彼方をベットに横にした、その隣にあつた椅子に腰かけた。

「……………ゴメン」

「彼方が謝ることじゃあないだろ？……………それにもう他人でもないし」

彼方の目が死にかけている…

「……………ありがとう、でも前にも似たようなことあったから」

「そういう問題じゃないだろ！！！」

俺は思わず怒鳴った自分に自己嫌悪に陥った。

「ゴメン、心配してくれたのに……………」

「い、いや…」

彼方が微笑みながら俺を見つめていた。

「実はさ……………中学の頃に…」

彼方は何かを決意したように話し始めた。

「いじめにあったんだよ……………真面目くんで気に入らないって理由で……………最初はただの暴力だった」

彼方の小さく掠れた声が自分の辛い過去を紡ぐたびに俺の心が鋭い何かに切り刻まれるような気がした。

「次第に肉体的な暴力から性的な暴力に変わっていった、毎日、毎日、レイプされ性処理の道具として扱われた……………」

俺は思わずガタンツと音を立てて立ち上がった。

「……………そんなある日、“彼”はたまたま通り掛かったって言うだけ……………」

「彼？」

「学校でも手の付けようのないどうしようもない不良でさ、かつての俺とは正反対のやつでさ関わることなんてないと思っていたけど………そいつが通り掛かって助けてくれたんだよ………学校でもそいつに勝てる人がいなくてさ………おかげでいじめはなくなつたよ………聞いた話だと、そいつが俺をいじめていた連中を脅したらしいけど」

「………彼方はそいつのことが好きなのか？」

彼方は俺の質問に驚いた………実際に俺も心の中では驚いてる………

「………違うよ、感謝はしてるけど、それはそれ………これはこれ」

「そいつはどんなやつだ？」

「…………… どんなつて…………… とことん、いやなやつだよ……………
…………… 太陽みたいな赤い髪をしている不良のくせに成績は学年
で常にトップで、その上スポーツ万能で容姿端麗とくれば女に困ら
ないし」

「いやなやつだな」

思わず彼方に賛同した…………… 固い表情を崩した俺を見て彼方が頬
を緩めていることに気付かなかった。

「…………… でも、そいつはいつも満たされていなかった……………
…………… いつも何かを探し求めている」

彼方が遠くを切なげに見つめてる……………

「……そういえば、俺の中学にもそんな感じに何でもできるやつが居たよ」

「……どんな？」

「綺麗な人だけど、いつもあんまり話さないけど、何となく惹かれるところがある人だよ」

「ふうん？」

「そういう人に限ってSなんだよ……彼方といい、その人といい」

「……………どついう意味だ？」

「それにしても彼方にもそんな友達が居るとは……」

「友達……と相手が思っていればな？」

やれやれと俺は肩をすくめた。

「もう少し愛想を良くしたほうが良いぞ？」

「お前はもう少し慎みを学んだほうが良いぞ？」

「そんな難しいことは彼方に任せます」

「俺もそんな面倒なことは光に任せます」

お互い、三十秒くらい真顔を保っていたがそのくらいが限界だった。

「ぶ。ぶ。ぶ。……」

「くくく……」

緊張が切れた俺達は風船が破裂したようにどどつと笑った。

午後の日差しが照らす保健室で俺達は互いに気になっていたことを話し始めた……趣味とか、好きな食べ物とか、他愛のないこと話していてひとつだけ気付いたことがある……俺は意外にも彼方のことを知らない……どういう休日の過ごし方とか、いつもどういう本を読んでるか……些細なことすら知らずにいた……彼方を理解できれば俺は自分の気持ちができる気がした。

光に助けてもらって、1週間が経って体の傷もだいぶ癒えて普段通りの生活を取り戻した。

「転校生を紹介する……入ってこい」

急に転校生が来るなんて…

そう思っていると教室の扉が静かに開かれた。

「俺は吉川ヨシガワ 冬樹フユキ………よろしく」

クール………というか冷たい感じの少年だな。

「彼方！冬樹に校内案内を頼む」

「なんでだ？」

「隣の席だから」

マジかよ。

「月宮 彼方だ、よろしく」

「……………ああ、それと教科書とか貸せよ」

命令形か？その上、疑問形でもないし。

朝のHRも終わり、あとの授業は今度のテストがどうだとか、ここはテストに出るとか下らない……………というかつまらない授業が続いた…難しくはないがやる気が出ないは確かだな、もう少し学んで楽しいと思える授業をしてほしい…これじゃあ日本の学力は上から

ないな。

「…………おい」

「……………なんだよ」

「校内案内してくれるんだろ？」

忘れた。

「仕方ない、行くか？」

「…ああ」

不機嫌そうに頷く吉川と俺は校内を周った。

六月のぽかぽか陽気が校舎の窓から零れ落ちる……………今月の終わりに父さん達の結婚式がある、何でもジューン・ブライドと縁起がいいからそうしたのだと……………初めてその話を聞かされた時には驚いたものだ、といっても予想はついてたから光ほど、驚きはしなかったが……………俺が意外にもちゃんと祝福できるくらいの余裕あることに自分でも驚いた…以前では考えられない……………俺は少しは成長したのかな？

「ここが音楽室で隣が美術室だ」

「……………ああ」

もう少し話しても良くないか？と思ったが四月の俺もこのくらいしか話さなかったっけ？と思うと俺は光にずいぶんと感化されたなと思わず笑みが漏れる。

「？」

「ああ、ゴメン、少し思い出し笑いして」

不思議そうな顔した、吉川は特に反応は示さずに俺の後に続いた。

結婚式もあるがその前にあれだな、テスト……………恐らく、
光に泣きつかれることを予想できるようにから教えるかが考え
物だ、まあ…俺自身は赤点さえ免れれば良いって考えなので教える
分は問題ないが……………

「どうした？」

「ご飯はどうするんだ」

いきなり肩を叩かれたので驚いた。

「冬樹はどうする？弁当なら俺の友達と屋上で食べるか？」

どうやら俺は光のお節介に伝染したみたいだ。

「……………ああ」

意外にも素直にうなづく冬樹……俺は首をかしげながら屋上に向かった。

屋上に吹く風に梅雨の湿気を感じた、まだ六月なのかと思うと、ずいぶん短い間にいろいろあったと思う。

「へえ、結構、屋上って穴場なんだ？」

「ああ…この学校は食堂もあるし屋上は意外に空いているんだ、それにここは一年の教室から近いし先輩達が来る前に来れるし」

「喧嘩にならないか？それって…」

「実はこっつて生徒指導室に近いから不良とかは近づかないし、普通の生徒は不良には絡まれたくないから滅多に利用しないんだよ」

「なるほど」

冬樹は無表情で俺を見つめる。

「どうかしたか？」

「いや、彼方って綺麗だよな」

は？

「どういう意味？」

「初めて見たときは綺麗だと思ってけど」

「だから、どういう意味？」

「ふん？」

吉川の髪を風が撫でる、恭と朔より低いとはいえ俺よりは高い吉川を見上げる形になっている。

「……………そんなに警戒しないでよ…それとも、ゲイだと思って軽蔑してる？」

吉川は苦しそうに笑う……………俺は痛々しい気持ちになった。

「いや……………でもつらいよな、男を好きになったら…結ばれる確率は低いし、仮にうまくいっても家族とかの問題もあるし」

俺は光と結ばれたって光を幸せにする自身があるわけではない……………むしろ、不幸にしかないだろう…もしかしたら、一生…もう二度と今の関係には戻れないかもしれない。

「そついう顔されるとそそるね」

「は？」

俺はじりじりと吉川にフェンス側に追い詰められた……………両手で逃げられないようにした吉川は口の端を上げた。

「吉川！何考えてる？」

「どつせなら名前で呼んでよ」

「は？何言っているんだよ、吉川」

「ふ・ゆ・き……………もし呼ばないなら」

吉川は俺の腕の上に押さえつけ、もう片方で俺の尻を掴んだ。

「ああ……………」

「……………結構いいじゃん」

「ああ…ふ、冬樹っお願いだからやめて」

「はい、よくできました」

押さえられた腕は解かれ、俺の尻を揉んでいた手も外された代わりに片手を腰に回され、もう片方の手でネクタイを引っ張られた。

「!？」

軽く触れた冬樹の唇……驚いた俺は後ろに下がろうとするがあいにく後ろはフェンス……顔を逸らすことすらできずに呆然としていた。

「ちょっと、いきなり何するんだよ」

「なにつてキスだけど？」

無表情だった顔は今や目は何か楽しそうに動き、口は意地の悪い笑みを湛えている。

「冬樹！？なんで？」

「ちつ…いいところなのに邪魔するなよ、光」

「邪魔つて、彼方？」

俺に気付いた光は驚きから怒りへと表情を変えた。

「なんで彼方に手を出してんだよ」

「いいだろ、第一お前に断ることでもないし」

「彼方は関係ないだろ！」

「俺は彼方がほしくなったの、別にいいだろ……明美さんとお前に関わらないって約束を破ったわけでもないし」

「ほしくなっただって…」

「そう一目惚れしたんだよ……光には関係ないだろ？恋人でも家族でもないんだし」

「……………ッ……………」

「は？なに？どうなってんの？」

いきなり言い争いを始めた光と冬樹に圧倒され押し黙っていたが二人が少し黙ったところでようやく、俺は現状を尋ねた。

「どうした？光？………冬樹！？なんでいるの！？」

屋上の扉から朔が入ってきた

「朔じゃん、久しぶり」

「朔！今日から転校して来ました吉川 冬樹くんですよ」

優も朔のあとに続いて入ってきた………そして、相変わらず能天気…

「それより、三人とも知り合いかよ」

「知り合いというか…まあ腐れ縁だよ………カナちゃん」

「とりあえず、仲が良くないことだけは分かった………って、カナちゃんって誰だ！？」

「かなただからカナちゃん」

「わあゝもう仲良しなんですね、さすがです、彼方くん」

わあゝじゃない、なぜか光と朔が凄じり凄じりしてるし、気付きたから冬樹は無視してるし、頼みの綱の優はこんなだし……俺にどうしろと？

「僕は鳴海 優です……で、あそこの背の高い人は名倉 朔です」

「知ってる」

……………光はなぜか、屋上から出て行った。

「光!？」

「ちょっと、カナちゃん？」

俺の手を掴む冬樹……

「悪い、冬樹……俺は光の兄だから行かないと」

「兄？」

「月宮 光……俺の新しい義兄弟だから」

掴む手が緩む……その隙を突いて俺は冬樹の手を解き光を追いかけた。

「
光？
」

俺は光の部屋の扉を開ける………
光はベットで寝てるみたいだ

「彼方？」

「どうした？光？」

光の部屋には初めて入る……散らかっているかと思いきや意外に整理されてる……いや、俺の部屋とは違い、必要最低限の物があるだけでただ物が無いだけだ……そういえば、入学してすぐ……
…光と出会ってすぐの頃に優に言われたことを思い出す。

『光くんが笑うようになったのは彼方くんと出会ってからですよ』

つまり、俺は光のことを何も知らずに好きになったのか……

「どうしたって？」

「急に学校飛び出して…………結構、探したぞ」

「ゴメン」

「いいけど、どうした」

机とベットしかないわびしい部屋…………この部屋でいつも光は何を
考えているのだろうか？

俺は机の腰かけに座った。

「そういえば、光の部屋に来るのは初めてだな」

「そうだな」

「冬樹と何かあったか？」

「……………それは」

光は押し黙る……………俺は降参ですっと手を挙げると光は起き上がり両手で体を抱いた。

「言うから…俺の隣にいてよ、彼方」

俺は腰かけから立ち上がり光に近づいた。

「言わなくてもそばにいるから安心しろ、それに光が必要とするなら俺はいつでもそばにいるからって前に言っただろ」

「彼方……………」

「俺達は義兄弟なんだから」

「……………うん」

遮光カーテンで光の少ない部屋の中で互いの表情が見えない中で俺達は必死に自分の感情と戦うしかなかった……………ぼんやりと六月の陽射しが闇の中の光の顔を淡く照らし出される。

「何がそんなに怖いだよ」

俺が言うと同時に光の瞳から涙がこぼれる。

「俺は……………今の幸せが失われるの怖いんだ」

「大丈夫……………俺が守るよ」

「なあ」

「なんだよ」

「一緒に寝よ？」

俺は思わず呆れた。

「なんだよ？」

「何でもないよ」

俺は光のベットに入る………黒い髪が鼻にあたり、鼻の中に甘い香りが広がる………俺より2、3？低いだけだが今はそれ以上に光が小さく感じる………俺の“大切な弟”に胸の高鳴りが聞こえないことを切に祈りながら俺も眠りについた。

「うん」

朝日？

「ぐう」

光！？なんで……って、あれからそのまま俺達は寝たのか……よく持ったな俺の理性。

「時計は……」

何時だ？

「八時かあ……」

「うん？」

「起きろ光」

「彼方！？なんで？」

「なんで？って昨日お前が…」

思い出したのか光の顔が真っ赤だ…。

「やれやれ…とりあえず、風呂に入れ…朝御飯を作って置くから」

「……………うん」

光の部屋から出て俺は台所で簡単な朝食を作った…。

盛り付けも終わり、テーブルで新聞を読んだと光がお風呂から上がってきた。

「うん？いい匂い」

光の髪はしっとりと濡れていて白い肌はお風呂に入ったせいかなのりとしたピンク色がとても扇情的で俺は生唾を飲んでしまった。

気を強く持たないと…。

「彼方？」

「……………どうかしたか？」

隣から俺の顔を覗き込む光

光の細くしなやかな肢体は彼に好意を持つ俺には拷問以外の何でもない…特にお風呂上りとくればなおさら。

「難しい顔をしていたからどうしたのかな？って」

「いや、少し夕飯について考えていたんだよ……」

すうくと光の顔が遠ざかる……光は俺の反対の席に腰かけ俺の作った御飯を食べ始めた…。

こうして光の顔をよく見ると美少年だと思う………鼻厘なしで…
中学のころはざぞおモテになったんだろうな…光って名前がよく似
合っくらい整っている…

「………そんなに見るなよ………なんか照れる」

「わ、悪い」

なんか気まずい。

「……………これから彼方はどうするんだ？」

「部屋で読書しようかと」

「……………根暗……」

「……………なんか言ったか？」

「……………な、何でもないよ？」

俺は舌打ちして食器を片付けた。

「ふう〜」

もう夕方か……あれから部屋でゆつくりしていたが光の心は不安定みたい……俺に甘えたいのか後ろから抱きついたりじやれたりして精神的疲労で過労死させられるかと思った……疲れたのか寝てる光をおいて夕食の準備のために台所に向かった。

「あらあら、彼方くん……」

今日は早く仕事が片付いたのか……。

「あけ………か、母さん!？」

カミカミなのが恥ずかしい……

「くすくす………それより、今日のご飯はなに?」

「焼肉……」

「光の大好物ね……たまには自分の好きな物を作ればいいのに……」

「俺はそんなに食に興味ないから……」

俺と母さんが話していると起きた光がリビングに降りてきた。

「うん？」

寝ぼけてるな……。

「……うつ」

母さんが急に倒れた……俺は急いで近寄った。

「大丈夫か？」

「ええ……」

「光……………そっちの肩を持って……………光？」

光の目は虚ろで額にはじわりと汗が出てる。

「……………」

「ちょっと……………光！？」

光は急に家から飛び出した……………俺は驚いてぼーっとしてしまった。

「彼方くん……………光を追いかけて」

「は？」

母さんは何か焦ったように俺に告げる。

「理由はあとで説明するから……………」

俺はとりあえず母さんをソファ―に腰かけさせて光を追いかけた。

「彼方くん、こんにちは」

「……………よお」

たまたま……………というかこのふたりがこんなところ（カラオケ）から出てくるなんて……………ナニしていたんだか？

「……………」

バカップルに付き合ってもらえないのでとりあえずシカト…。

「おい、待て」

「なに？悪いけど、のろけなら余所当たって」

足早に立ち去ろうとするが首根っこを掴まれ阻まれた。

「どうしたんですか？そんなに急いで」

「母さんが倒れて光が家を飛び出したんだよ」

「でも、なんで光が？」

「朔……………彼方くんのお父さんと光くんお母さんは結婚したん

ですよ」

「そうか……………って明美さんは大丈夫なのか？」

「大丈夫だろ…今日は父さんは早く帰るって言っていたし、もう帰っているところだろ？」

「……………俺…光の居場所知ってる」

「どこだ？」

朔は哀しそうに口を開いた。

「……………光は…」

電車に二時間、揺られて着いたのはただブランコとベンチだけの寂れた人気のない公園………恐らく………昼間でもここに遊びに来る親子連れは皆無だろう。

「こんなところにいたのか？」

街灯もなく心もとない月明かりが照らす公園のブランコに乗ってる光。

「彼方!？」

光は驚いた顔で俺を凝視した。

「朔に聞いたんだよ」

「……………そうか」

俺はやれやれとため息を吐いた。

「落ち着くまでここにいるぞ」

「え？」

「父さんには連絡しといたからお前が落ち着くまでここで休んで行くぞ」

さらに驚いたような顔の光……どうやら怒られるか無理矢理連れ戻されるとでも思ったのか…。

「まったく、お前は手がかかるよな」

俺は光の隣に座る。

「……ゴメン」

どうも冬樹が来てから光はおかしい……………まるで何かにおびえて
いるみたい……。

「朔からどこまで聞いたんだ？」

「光がどこにいるのかしか聞いてないよ……………何があつた
のか光の口から聞きたいからな」

「そうか」

長い沈黙が続く……………こういう時は僅かな時間でさ長く長く感
じる。

「実はさ……」

光が話し出す……………光への性欲を抑え……………兄として、家族と
して……………光を支えるために、俺は光の言葉に耳を傾けた。

「俺って実は私生児なんだ……」

「……つまり、愛人の子供……っていうことか？」

「そう……お母さんと……本来ならお父さんと呼ぶ人の間に生まれた子供なんだよ……全部、初めからお母さんは騙されていたんだよ……俺が生まれて取り返しのがなくなってからお母さんは真実を知ったんだよ」

つまり……光の抱えてる闇は……。

「大体分かった……そんな環境下で生まれた子供とその母親……愛人を作るような人がまともな扱いをするはずがない……DVとか虐待が起きても不思議じゃあない」

そういう話は腐るほどあるし……今の時代……親が子供を虐待するのが不思議ではない時代だしな。

「……そうだよ……あの男はお母さんを騙した拳句に俺達に暴力を振った……」

「……………だから、飛び出したと……………そのころを思い出して」

「……………そうだけど……………それだけじゃない」

「？」

「一度、お母さんは流産したんだ……………あの男にレイプされて宿った子供を…」

光の顔がより一層険しくなる……………。

「……………けど、その男から逃れることができなかった……………なぜなら、光を育てるのにお金がいるから」

「……………そう……………お母さんがその男のところはずっといたのは俺のせい……………結局、中学の頃のクラスメイトが俺の家庭の事情を知ってしまってお金を貸してくれるまで……………俺達はあの男に人生を滅茶苦茶にされたんだ」

………「こういう時は同情しても哀れさしか生まない………
だから思ったことストーリーレートに伝える必要がある。」

「でも、あの時の光じゃあないだろ……こうやってちゃんと過去と向き合うこともできるし」

「でも……」

「それに俺もいるし、もう光と母さんが二人で生きていたそのころとは違うんだ……俺も父さんも光達を家族だと思ってるしなれて良かったと思う……俺が傷ついた時に光は助けてくれたし……だから俺も光を助けない………それとも俺ってそんなに頼りないか？」

光はうつむきながら涙を零す……俺は震える背中をなでた。

「うつん………ありがとつ」

掠れた声に壊れそうなほど弱って見える瞳…綺麗だと思っけど…やっぱり光には笑ってほしいと思う。

「しかし……………お前のクラスメイトって何者だ？普通はお金を貸したりしないだろ…食費だけでもかなりの額だし」

「そいつは中一の夏休みで父親をなくしてその時はすでに母親は他界して天涯孤独の身で両親の遺産で生活していて親が大企業の重役の父親と弁護士之母親で貯金もたくさんあるし、その人も昔は天才子役でドラマとかに出ていてお金があるからとか……………今考えれば、かなり非常識な人だね」

「相当な……………でもいいやつだな…普通は好き放題したい年頃なのに…」

「全然？人を無視するし、馬鹿にするし普段の性格は最悪だよ」

「無視するのはともかく、お前は馬鹿だろ？」

「ひっど」

あ！そういえば……。

「もしかして、冬樹と光って……」

「ううん、違うよ……冬樹の母親は社長令嬢で冬樹はあの男の前の人とできた子供だよ」

「つまり……財産目的の結婚てことか？」

「そう……大切な夫を亡くして弱った心をその男に狙われたんだよ」

これじゃあ、ある意味で冬樹達も被害者でしかない。

「あのさ、冬樹とも仲良くしろよ………ある意味……光と母さんと一緒だろ？」

「………うん……怖いけど彼方が言うなら……」

不安そうに手を強く握り締める光…俺はその手をほどもぎ両手で握った。

「俺が居るか安心しろよ……………ちゃんと守ってやるか」

周りの雰囲気が柔らかくなる……………少し雑談でもしてから帰ろうかと思っていると俺の携帯のアラームが鳴る。

「……………もしもし？」

『彼方！……！』

うるさい……………まったく電話に出ると叫ぶのが流行っているのかよ。

「……………いろいろ言いたいことはあるがなに？」

『明美が倒れたって最近整理も止まってるっていうし重大な病気だったらどうしよう？』

「知るか……………とりあえず…黙れ」

俺は電話を切ろうとしたときふつと産婦人科で子供が大好きだった夕華母さんユウカとの会話を思い出した。

「待って……………くそ親父」

『……………なんだ？冷血息子？』

……………もう一度本気で電話を切ろうと思ったが何とか耐えた。

「どうした……………もしかして大変な病気なのか？彼方」

「たぶん違うと思う……………それより父さん？」

『なんだ？』

「今……………夕華母さんとの会話を思い出したけど……………
……………もしかして明美母さんは妊娠してない？」

いつだろうか？母親は子供を産むためのは様々な苦難を乗り越えなきゃいけない……………なぜなら子供を育てるのはもの凄く大変でやりがいのある母親の仕事だから……………まずはこの試練を乗り越えられるほどの覚悟がないと子育てはうまくいかないから……………
……………産婦人科医であつた母親が自分の仕事に熱く俺に語ってくれたことを。

『そつえば……………光を生んだ時と似た症状が出てるかも』

あ！母さんだ！

「そつか……………もしかしたら俺に兄弟が増えるのか」

光は夜空に呟いた。

「違うだろ？ “俺達” に兄弟だろ？」

俺は光の呟きを素早く訂正した……… 光は驚いたあと深く頷いた。

「そうだな……… “俺達” の兄弟が増えるのか」

「だな……… もう家に帰るか？」

「帰ろう……… なんか無性に恋しくなっ たし」

俺と光は足早に我が家に向かった……… 新しい希望が生まれるかもしれない期待を胸にしながら。

週明けの学校は長く感じてしまうから好きじゃない……あのあと母さんは今日にも病院に行くらしい……父さんもたまたま休みなためについていくと聞いていたが………周りの人に迷惑をかけなければいいが………不安だ。

「彼方!!!!」

「うるさい……耳元で叫ぶな」

冬樹は意外にも学校に馴染みクラスの女どもからキャキャと黄色い声が聞こえる……………

「いいじゃん、俺と彼方の仲だし?。」

「そんな仲になった覚えはない……てか、なんで俺と仲良くなりた
いんだよ」

「彼方はモテモテだよ？クラスの女子が虎視眈々と狙いを定めてい
るし？まさに獣そのものだよ……独りでいると襲われるかも？」

俺は帰り支度をしながら冬樹に呆れた視線を送った。

「…………俺の隣にも獣はいるしな？」

「はは……そうだね」

冬樹は思わず苦笑いした。

「俺と仲良くするのもいいけど、光とも仲良くな？」

「…………仕方ないな……彼方がお願いを聞いたらしいよ」

「なんだ？」

「とりあえず……こっち来てよ」

人気のない屋上まで着くと冬樹はふうくと息を吐いた。

「光から聞いたかも知れないけど、俺の母さんは財産目的で狙われたの」

「ああ……知ってる」

「けどさ……俺達に近づく奴らの大体がそうだったから驚いたりはしなかったけど……誰も信じられずにいたんだ……」

「そうか」

「けど……彼方と出会ってこんな風に人は笑うのかって……他人と逃げていた俺にとってとても新鮮だったんだ……誰かと関わりたいと思ったんだ……そして……光と俺の過去をしても偏見を持たずに俺達を見てくれた……ふざけてとか、いい

加減な気持ちで言っているわけではないんだ…俺は彼方のことが好きだ」

冬樹は俺の顔の近くに顔を寄せて両手で握った。

「彼方！！！」

勢いよく屋上の扉を開く…俺は扉のところ見ると何故か光が立っていた。

「光？どうした？」

光は俺を冬樹から話した…俺達が何かを話す前に俺の手を引っ張って屋上を出た。

ぽつりぽつりと雨が降る…梅雨だから降ってもおかしくはない……
………実際、今日の天気予報は雨で午後から土砂降りになると…。

「雨だな」

「……………そうだね」

俺が連れてこられたのは昔……………理科室として使われていた教室で
今は使われてない…光は長テーブルに鞆を置いた。

「……………やっぱり簡単にはいかないか？」

「……………彼方は俺のこと、どう思う？」

「どつって大切な義兄弟だけど」

光は胸元のシャツをくしゃりと握り不安げな瞳で俺を見た。

「俺は……………彼方を義兄弟として見てないよ」

俺は思わず息を飲む。

「俺はあの男のせいで愛を……………人を信じれなくなった……………
……………彼方もお義父さんも」

出来るならこの場から逃げ出したい気持ちになるが足が思うように動かない。

「けど……………彼方と出会って……………俺は今まで背負っていたものを一緒に背負ってくれて……………いつも俺の隣にいて……………いつの間にかそれが当たり前になって……………最初は俺自身の気持ちが分からなかったけど……………今なら分かる……………彼方のことが好きだよ……………愛してる」

まさに呆然とする……………といえいいのか……………今ま

で光のそばに居ることだけを考えてきた…悪く言えば見返り………
良く言えば愛されるなんて思ってもいなかった………ただそば
に居れば良かったのに………光の幸せを近くで見れば十分だった
のに…。

光は教室から出ようとする………俺は急いで両手で肩を掴んだ。

「待つてよ」

「分かっているよ………都合の良
いのはだけど…」

俺は思わず笑ってしまつくらいぎこちないキスをした…歯がぶつか
っても止まることなく。

「……………」

「……………」

沈黙を了承と取った俺はまず、お互いの愛を確かめるように触れるだけのキス……………光の唇に俺の唇と重なる……………。

「彼方……………」

物惜しそうに俺の名前を呼ぶ光……………三度目のキス……………
今度は深く深く求め合うような深いキス……………少し開いた口の隙間から舌を入れた……………俺は光の齒列をなぞり舌を絡めながら窒息してしまふくらい激しく……………光の足が碎ける……………腰に手を回し頭を寄せさらに深く深くキスをする……………しばらくして俺は口を離すと光の口の端からキスの深さを示すように唾液が零れる……………俺はそれを舐めとった……………光は一生懸命に息を取り込もうと肩で息をする……………少し経つと何が起こったのか理解したのか顔を赤らめる。

「うそ？うそ？うそ！？」

赤くなった顔を両手で隠して叫んだ。

「ほんと……そう簡単にあきらめきれなかったよ……
光のこと」

「ヤバイくらいうれしい」

嬉しそうに喜ぶ光を抱きしめた……俺のより小さく細い体を強く優しく抱きしめた。

「……………っ……………」

あのあとしばらくして帰ろうとしたが浮かれすぎて雨が降っていたことを忘れていた……………仕方ないから迎えに来てもらおうと携帯を取り出すとメールが一通……………内容は母さんが妊娠していたと…用事が済み次第迎えに来るから六時ごろになると……………いや、現実逃避はそこまでにしておいてこれをなんとかしないと…

「この馬鹿……………ふぁ……………やめろ」

「なんで？」

「そんなところでしゃべるな……………とりあえず離せ…あっ」

ふたりで長テーブルに座っていると光はいきなり俺のズボンのファ

スナーを外し俺自身を舐めだしたのだ…。

「どうして？付き合ったらここ舐めるって中学の友達が読んでいたマンガにあったよ」

どんな趣向の友達だよそいつは……………そんなことより近いうちにそいつは絶対殺す。

「……………光はセックスしたことあるのか？」

光は思わず吹き出した。

「ないよ…あるわけないだろ」

俺はファスナーを閉じた。

「彼方はしたいのか？」

俺は思わず苦笑い。

「そうだけど…お前は無理だろ？」

「俺は彼方としたいな」

上目使いで俺を見つめる光…。

「……………分かった」

俺はごくりと唾を飲む……………俺は光の制服のネクタイに手をかける……………しゅるりつとネクタイを外す……………俺はボタンをひとつひとつ外した……………制服の隙間から見える光の躰はとても綺麗で思わずじっと見惚れてしまった。

「……………そんなに見つめるな」

「……………ごめん……………行くぞ?」

「……………うん……………来て」

恥じらいつつも両手前に出し誘う光……………俺は光を抱きしめた……………
はだけの制服のせいでいつもよりもとても扇情的だ。

俺は舌で光のうなじ、のどぼとけ、鎖骨を順番よくなぞり胸にある
果実に行きつく……………。

「あつ」

光は初めての快感に軀を震わせ逃げようとするが長テーブルの上で
身動きがほとんど取れずにいる……………俺は片方を舌で転がしたり吸
ったり、もう片方を手で押したり摘まんだりした……………そのたびに光は
甘い声を上げ……………俺の下半身はすでに熱をため込んでいた……………俺
は光の制服を完全に脱がしベルトを外す……………俺の心臓が壊れそう
なくらいに音を立てる……………ズボンと下着を一気に脱がす……………
……………少し離れて光の軀をじっくりと食い入るようにつめる……………
……………真夜中のように深い黒いさらさらの髪、黒曜石な凜

とした瞳……………細くしなやかで白い肌と軀は芸術作品に見えてしま
うほど綺麗だ……………。

俺は光の足を開かせて蕾に普段、光が稽古を終えて体を洗う際に使
うボディークリームを指につけ慣らしていく。

「あっあっあっ」

水音と光の喘ぎ声が教室内に響く……………初めてのためじつと
りと慣らしていく……………俺の指がある一点をあてると光はより高い声
で喘いだ。

「あああああああ！？なに？これ？」

「………」

「ひゃあ？なに……？へんになる……？」

軀を震わせ未知の快感を味わう光…俺はそこ集中的に攻めると軀が
らじわじわと汗ばんでくる…光の軀を横にする。

「大丈夫か？」

光にとって初めての行為だ……………せめて気持ちよくやってほし
い。

「……………は、早く!…」

早くねだる光……………俺は制服のボタンを外す……………これからこ
とを考えると緊張してしまう…。

「焦らすな…」

そんなつもりはないんだけど……………俺は上着を脱ぐ…その瞬間、
光が息を飲むのを感じた。

「……………緊張してんのか？」

「……………し、してないよ」

「……………それは残念だな…俺は緊張してるのに…」

「……………っ…」

真っ赤な顔を両腕で隠す光……………俺はくすくすと笑つとむきになつた光は起き上がった。

「彼方の躰が綺麗なのが悪いんだよ……………!?」

起き上がり言い返してきた光は自分が言ったことに赤い顔をさらに赤くした……………俺の顔もきつと真っ赤だ…。

少しの間の沈黙……………光は顔を隠そうとする……………俺はその手を掴んだ。

「やだ……………変な顔してるから見るな」

「……………見せてよ」

「……………なんだよ、それ」

光の頬は赤く染まり、いつもなら凜とした強い瞳も今はゆらゆら揺れている……………普段なら絶対見れないほど妖艶で……………日頃の光を天使とたとえるなら今は人を惑わす堕天使ように色っぽくて…。

「彼方……………なんか、俺だけ全裸で恥ずかしい」

まだ自分が行為の途中だということを思い出し俺はズボンを脱いだ。

「彼方……………綺麗だよ…」

「綺麗って…」

「ほんとに綺麗だよ…なんか彼方を犯した人たちの気持ち分かるな……………こんなに綺麗だし格好いいし」

「……………俺は光のほう綺麗だと思うよ…」

俺の胸を指でなぞりながら言う光……………その感触がなんだかくすぐったい。

指は段々と下へ下へと降りてくる……………太腿に触れると俺自身は分かりやすく反応した。

「なあ……………」

「なんだ？」

「それって、もしかして……………」

「無理なら最後までシないよ」

俺は光の額にキスを落とす…大切だから傷つけることはしたくない。

「……………ううん……………大丈夫だから」

『来て』と聞こえるか聞こえないくらいの声の大きさだった俺の耳にしっかりと届いた…俺は光の緊張を解くためにキスをする…
……………もう何度目してはいるが胸の動悸は抑えることはできない…。

「挿れるぞ？」

なんとか頷く光……………俺は光が頷くと俺自身を挿れた。

「あああああああああ！？」

指の時とはくらべものにならないくらい喘ぐ光……………目からは涙を浮かべる。

「痛いかな？」

「大丈夫…」

「四つん這いにするぞ、そのほうが負担が少ないから」

「……………彼方の顔が見えないからヤダ」

息を切らしながら俺の首に手を回し腰に足を巻きつける光……………この妖艶で綺麗な光を言葉で表現しようとする逆と逆に言葉に詰まってしまふ……………どうやら今の俺のボキャブラリーではこんな美しい人を表すことはできないようだ。

「あっ」

俺は腰を突き上げる………涙と汗が光の顔を湿らせていく………俺の腹に光自身があたる………ソレは今にもはちきれそうで…。

「もっと気持ち良くしてやるよ」

「ひゃ？なに？なんだよ、この感覚！？」

「イクって言うんだよ、こういう時は………知らないの？」

初めての絶頂に戸惑いを隠せない光………自身を数回扱つと光は喘ぎながら果てていった。

「ふあああああああああ」

果てると俺に全体重を預けてきた光………。

「…………俺も…イク」

俺はもう一度突き上げると光の内壁が俺を締め付けてその勢いで俺も果てた。

「あああああ、あ、熱い、熱いよお」

俺が果てると同時に喘ぎながら気絶した光…………無理させてしまったことを後悔しつつ俺は愛しい人のセックスの余韻に浸った。

俺は性交で疲れた体に鞭を打って気絶した光の処理を済ませ制服を着せた、初めての体験で疲れたのだろう光はスヤスヤと寝息をたて

ながら寝てる……ふう〜と息を吐く、携帯を開くと時計が指していた時刻はまだ五時……テストが近く他の生徒は恐らく家路に着きテスト勉強に励んでることだろう……。

自分がセックスにこんなにも慣れてるなんて……中学のころ……今も鮮明に思い出すことができる過去……。

『なあ……こいつの殴るの飽きたし、別のことしない？』

『……………たとえば？』

『犯してみるの？』

『マジメちゃんを？』

『こいつ………意外と綺麗な顔してるし』

『や、やだ…やめろ』

それが始まりだった………。

『やば………こいつのナカ………気持ち良すぎ………ああ』

『くあああ、熱い、熱いよ』

『………そんなに気持ちいいのか？』

『………ああ、天国見れるぜ』

『………俺も』

それからというものは俺は大勢のモノを前と後ろで啜みこみ、突起を弄られ、それなのにイってしまう俺の淫乱な躰…前立腺を突かれればイって、突起を弄られれば喘いでしまう惨めな躰……………そんな俺が本当にいいのだろうか？……………その少年と結ばれて…。

「彼方？」

「起きていたのか？」

「いや…少し前から起きていたよ…なんかすごい顔していたよ、彼方……………どんなに呼んでも答えないし……………何を考えていたの？」

「なあ……………光？……………俺は何人の人に足を持ち上げられたと思う？……………そんな俺が光と付き合っているのかな……………」

いつの間にか起きていた光…… あきらめていたのは結ばれないからだけではない…… 幸せにする自信がないからでもある……。

「……………それなら俺も同じようになればずっとそばに居てくれる？」

「そ、それは」

いやだ……。

「もし、彼方とそれで付き合えるのなら俺はかまわないよ」

「でも……………父さんたちも……」

「信じようよ……………家族……………なんだし……さすがに今は言えないけど……………新しい家族ができて俺達、ふたりで生きていけるようになったら話そうよ……きっと分かってくれるよ」

「うん……………そうだな…俺も信じるよ…父さんと母さん…
そして光も」

俺達は触れ合う誓いを込めたキスした……………雨は上がり…夕日
が教室を染め上げる…その中で俺達は永遠の愛を誓った……………神でも
なく、夕日でもなく、ほかの誰でもない愛しい人…俺は光に、光は
俺に…陳腐でありきたりで不格好かもしれないけど、それでもそれ
が俺達の愛の形だから。

六月の福音

「……………」

「……………」別に言いたいことや笑いたいことがあれば遠慮しないでいいぞ？」

「べ、べ、別に…な、何でもない」

「声が震えてるぞ！彼方！！そんなに似合わないのかよ」

「まあまあ」

「そうそう…」

今日はお母さんとお父さんの結婚式の前日…親しい友人を呼んでやることになった…だが。

「…それにしても似合わないな…」

「どうせ、俺はお子様ですよ」

そんなに俺のスーツ姿がおかしいのかさっきからみんな笑いをこらえてる…。

「光くと彼方くん？サイズはどうかしら？」

朔のお母さんが俺達のスーツをサイズを確認する…。

「いい感じに似合ってるんじゃない？二人とも」

「そうですか？」

「……………単純……………」

「聞こえてるよ？彼方？」

「あらあら、本当の兄弟みたい」

「……どつちかというと保護者と子供だよね？」

「そつだよな？」

彼方は呆れたようなため息を吐いた。

「保護者はお前らふたりだろ？……しかも何気に過保護だし」

「そうなの？彼方くん？」

「……………そうですね…光がいるとなかなか素直にならないけど…」

「この子は父親似て素直じゃあないからね」

「ちょ、母さん！？」

「さあ、裾直しするからアンタは光くん達をどっかに連れて行ってあげなさい」

「どっかってどこだよ」

「そのくらい自分で考えなさい、この甲斐性なし」

朔のお母さんは肝っ玉でさすがの朔も頭が上がらない…。

「せっかくだし、うちに来るか？」

「彼方くん？いいの？」

「もちろん……………もうすぐ子供が生まれるから家の整理してるけど…ふたりだけだと、結構時間が掛かって…」

「それならこの筋肉バカ連れて手伝わせない」

「本人の意見無視！？」

「こういつとき生かさないでいつ生かすのよ、その無駄にある体力」

「まあまあ」

今ではすっかり朔の家族とも打ち解けた彼方…お父さん達が仕事で忙しく家に居ない多いから最近では俺が朔の家に泊まる時は一緒に泊まってる…。

結婚式当日…白い雲と淡い青色の空、天気は良好……会場は全体として白で統一された高級感あふれる飾りつとなっている。

「彼方の親父ってお金持ちなんだな？」

「いや、ただの七光だよ」

「ちなみにどんな方なんですか？彼方のお父さんって？」

「どうもこうも正反对だよ、気さくで人柄もいいし」

嘘だつと同時に叫ぶ優と朔……でも……確かに、性格は正反对なんだよな……。

お父さんが気心が知れた人たちと一緒にのほろが退屈しないで済むだろうって俺達四人を同じテーブルにしてくれた………確かにこういうところはあまり来たことないから苦手なんだよな……彼方は平気そうな顔して……。

「光と彼方と………優くん、朔くん……だったけ？よく来てくれたね？」

噂をすれば…。

「……………ちっ」

相変わらずだな…彼方は…。

「いきなり舌打ちか…」

「呼んでない…」

「こいつは置いといて…優くんと朔くん…よく来てくれたね…ありがとう」

「いえ、こちらこそ」

「いつも光くんがお世話になってます」

「こちらこそ、彼方がお世話になってます」

朔と優は椅子から立ち上がりお父さんに挨拶する…それを横目で見ながら不思議そうな顔をする彼方…。

「……………ところでこんな場所までわざわざそれだけを言うためだけに来たのかよ？……………まさか、とは思うが迷ったわけではないだろうな？」

「……………実はそうなんだ」

「……………」

無言で睨みつける彼方…………。

「はあ……………少し行ってくる」

彼方達が人ごみに消えていく……………見えなくなって優は話し始めた。

「なんか、本当に似てませんね？」

「ああ…でも意外にあればあれで馬が合う……………と思うぞ」

「そうだね」

「それにしても良かったですね、いい人たちで…」

そういえば…。

「朔は初めは反対してたよな？再婚のこと？」

「……………そういえば、そうだったな」

「なんか、もう何年も前のことに感じますよね……………彼方くんと出会ったのもつい最近なのに……………」

「あの時では考えられないことだよな……………まさか、彼方と光がそういう関係になるなんて……………ろくなやつじゃないとは思っていなかったからな……………彼方も聖夜さんも」

「俺としては朔と優が付き合っていたのがびっくりなんだけど？」

朔と優にバレた……………というか、なんか変な流れになってカミングアウトすること……………。

「それは悪かったって言うてるだろ……………というか、彼

方は速攻で気付いたぞ?」

そうなんだよ……………彼方のやつ…気付いているのに俺に内緒にしていたんだよな。

「どうせ、俺はお子様ですよ」

「誰もそんなこと言ってないだろ……………てか、彼方はまだか?」

どうやら、お父さんを送ってきたのか…。

「呼んだか」

朔は助かったと言わんばかりに彼方に助けを求めた。

「ダメだぞ…朔をいじめたら…」

「彼方…」

「結婚式が終わったらあと片付けとか誰が手伝うと思っているんだよ」

「……………どうせ、そんなことだろうと思っていただけね」

「……………で何を話してたんだ？」

不思議そうに眉をひそめる彼方…。

「特に大したことじゃないよ……………あ、始まるよ」

あたりが静けさを取り戻す…自然と笑みがこぼれる…この瞬間からはじまるのか…俺達の幸せな日々が。

白い教会風の建物の前……白いタキシードとドレスの夫婦を祝福する声が飛び交う…意外にも多くの人々が来てくれている…その中には俺や彼方を助けてくれた人たちもいる…隣に立っている彼方を見ると少し口の端が緩んでる。

お母さんがブーケを投げる…ブーケは空高く舞う……。

「ぶっ」

「……………わざわざ、顔で受け止めることないだろ…」

俺の顔にブーケがぶつかりその反動でこけってしまった。

あたりが笑いに包まれる…隣にいた彼方の顔には呆れが半分と心配が半分……………これから続くであろう幸せな日々には俺も彼方も笑った……………。

あとがき

tearsです、どうもです。

とりあえず、これで完結です…補足的なものを入れるかもしれないが…

意外と長くなってしまった…もうすこしサクサクと読みやすいスト重で短めの小説に仕上げたかったのに…スト重が微妙なうえ長くなって…スト重って長いのが多いから短めで読みやすいのを…と考えたのに、長さは微妙でいろいろと消化不良気がする。

まだまだ鍛錬がたりんな…頑張ります。

この小説は二次創作はOKです……作りたい方はコメください。

彼方達を弄り倒したい人たち募集中です（笑

愛しいアナタへの想いを綴って

もう八月……もうすぐ、赤ちゃんが生まれる予定日まであと一週間を切った……。その前にどうしてもしたいことがある……。

彼方と付き合って二か月になるがいつもセックスするたびに感じるのだが彼方はいつも俺がイクとすぐにやめてしまう……。彼方が俺のナカでイったのは初めて臍を重ねたとき以外はない……。悪いわけではないが不安を覚える……。それは赤ちゃんが生まれたとき……。一番、我慢するのは間違いなく彼方だろう……。だからこそ、臍を重ねるときくらいは自分の欲望のまま動いてほしい……。

「彼方……」

俺は腰にタオルを巻いただけの状態で彼方の部屋のベットに潜っている。

「ちょ……なにしてんの？」

彼方は風呂上りで湿った髪がいつもに増して色っぽい…。

机の椅子に座った彼方に抱きついた。

言い訳になるかもしれないが彼方のテクニックがうますぎていつも翻弄されている合間に終わってしまう…… 臍を愛撫する手と臍を走る舌によつて臍を柔らかくされ……あとは数回俺自身を扱われればイってしまう……あまりにも気持ち良すぎていったあとにねだる余裕はなくてただ成り行きに身を任せるほない。

「やめろ!!」

苦しそうで泣きそうな顔で叫ぶ彼方……俺は傷付けたいわけではないのに……俺は肌を密着させてキスをした……彼方の頬を掴み深いキスをして……これが終わったら部屋に戻ろう……。

俺が立ち上がり戻ろうとすると手を引かれ突き飛ばされる……
……… すぐになにかに覆い被される… 彼方の目にはいつもある余裕
がない……… 着ていた服はいつの間にか脱いでいた…これ
からのことを考えると背筋が震える…。

荒々しくキスをされ窒息寸前まで追い込まれた……… いつもなら愛
撫でをされるのだが、今日は違う… 俺は四つん這いになりその隙間
に彼方の躰が入る……… 後ろを見られてるだけで俺の躰は感じてし
まう… 指が挿れられる……… 細い指が俺の前立腺を攻め立て………
… 口からは甘い声が漏れ……… 両手から力が抜け崩れ落ちそうに
なる………。

「あっあっあっ…んあ」

後ろがある程度、ほぐれると彼方のモノが宛がわれる… 一気に貫か
れてしまふ… 俺は躰を弓なりにして津波に流されるような抗いきれ
ない快感に耐える……… まだ彼方はイってない… 鋭く腰を
打ちつけられてついに俺は崩れてしまった… でも腰は彼方に掴まれ
尻を突きだしてる状態になっている……… 俺は顔をシートに埋めて…
彼方は舌を俺の背中に走らせたり、吸ったりして背中に赤い斑点が
付けられる……… 感じる somewhere を何度も突かれて俺と彼方は同時
にイった。

「あう」

彼方自身が抜かれ思わず物惜しい声が漏れる………すぐに躰が反転され仰向けになる………足を思いつきり開かせられる………すぐに彼方はまた俺を貫いた………一度、放ち萎えた俺のソレもあつという間に復活していた………彼方の肩に足を乗せ何度も突かれた………俺は彼方の首に手を回し必死にしがみついき何度も押し寄せる快感に身をゆだねた………朝になってふたりそろって気絶するまでそれは続いた。

昨日のセックスは格別に気持ち良かった……朝になると果てたと同じ時にふたりで気絶するくらい激しくお互いを求め合った、彼方の本気の雄を見て安心する……彼方も俺と同じ感情を抱いているのだと………別に疑っているわけではないが。

情事が終わった甘いひととき…俺はこの時間が好きだ……………ふわふわした気分が何とも言えない…肌を重ねると伝わる体温が、さらさらの茶髪の髪が俺の肌に触れる感触が、俺を見つめる綺麗な茶色い瞳と視線が交わると……………日頃の悩みがどうでもよくなる、なにがあっても頑張れる気がする……………彼方は苦手らしいけど…。

「……………彼方？」

「……………なに？」

「謝らないでね？俺が望んだことだから……………」

「なんで？」

「だって、いつも彼方って我慢してるし、もうそろそろ赤ちゃんが生まれてくるから……………これまでに我慢することが増えるだろ？」

「そんなことはない」

「だから俺と躰を重ねるときくらいは気持ちよくなってほしい……
……辛いんだよ……何もできないから……それに俺も彼方として
いると気持ちいいし……それとさ、不安になるんだ時々、彼方は
本当に俺のことが好きなのかって……いつも俺だけイって終わる
から……」

「光」

「俺は彼方のことが好きだ……シたいと思うのは彼方だけじゃない俺
だって彼方に欲情するよ……なにかしてあげたい……だから何でも
かんでも我慢するよ……俺達は恋人だろ？」

触れるだけのキス……これはこれで気持ちがいい………もと
もと性欲に乏しい俺には知識も少ないし、そんなにセックスに願望
があるわけでもない………まさか俺がこんなにハマるのはきつと相
手が彼方だから……この気持ちを彼方に知ってほしい。

処理を終えて俺は彼方部屋で余韻に浸っている最中…。

「何してるの？」

パソコンに向き合いカタカタと叩く彼方…。

「え〜と……携帯小説を書いている…」

「どんなの？見せて、見せて」

「ちょ…」

これって…。

「俺達の？」

「ああ」

へえ〜。

「いいんじゃない？」

「いいのか？」

「だってほかの連中にも俺達の愛を見せつけたいじゃん」

「お前…キャラ変わってないか？」

「気のせいだろ？あ！でも男女ってしかも俺が女役…まあいいか？」

彼方は呆れた顔になった。

「彼方にはこういうストレス発散する何かが必要なんだよ…」

「光…」

「この小説にリアリティが増すようにしないと？」

「そうだな」

きつとこれからも泣いたり、喧嘩したり、笑ったり、怒ったりする

だろう……それをどういう風に受け取り生かすかはその人次第……
彼方みたいに物として見える形にするのもありだと思う。

「そういえばこの小説のタイトルは？」

「この小説のタイトルは……」

『愛しいアナタへの想いを綴って』

「いいんじゃない？」

「そう？」

「ああ……これからも俺達の愛を綴るわけだ」

「そうだね」

俺と彼方の目と目が重なる……俺は彼方の頬を掴み触れるだけのキスをする……それはいつのまにか俺達の間で了解の証となっている……再びパソコンと向き合い書き綴る彼方……彼方はどういう風に物事を感じてるのだろう？俺は携帯を取り出しサイトを探す……彼方はこれからもいろんなことを見て学んでいくのだろう、そのたびにどんな物語を綴って行くのだろう……それが今がら楽しみで仕方ない……少しでも近く、少しでも深く彼方を理解して支えたい……今はまだ俺が彼方の小説を読んでは内緒にしようと思う……これからの日課になるであろう……今まで小説の類は最後まで読んだためしはないがきつと最後まで読めるだろう……。

e n d

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1246s/>

愛しいアナタへの想いを綴って

2011年7月27日13時10分発行